

治承三年十月『右大臣家歌合』注釈

武田元治

ここでとり上げる『右大臣家歌合』は、治承三年（一一七九）十月、右大臣藤原兼実が自邸で催した十題三十番の撰歌合である。

その作られた状況は、兼実の日記『玉葉』によると、歌題十題について左右の歌人各十人が詠んだ歌から、左方右方それぞれの合議で左右各三十首を撰ばせ、これを結番して、十月十八日に兼実邸で披講をしたという。そして十月二十日、この撰歌合の書巻を藤原俊成のもとに送り、勝負を判定することを求めている。

俊成は左方の歌人でもあったが、出家の身であり、また判者として公平を期するため、撰歌や結番や披講の場には出席していない。なお、俊成判の兼実家歌合で現存するのは、これが唯一のものになる。

この歌合の伝本は、二類に分けられるが、ここでは一類本に属する版本を底本とする『新編国歌大観』の本文によらせていただき、解釈を試みる。ただし句読点や返り点は、私見によって新しく付した。

右大臣家歌合九条殿下兼実
治承三年十月十八日

題

霞花子規月紅葉雪祝恋旅述懐
歌人

治承三年十月『右大臣家歌合』注釈

左方

女房 皇太后宮大夫入道 季経朝臣 隆信朝臣 行頼朝臣 師光

良清 俊恵 寂蓮 别当局皇嘉門院女房

右方

大式入道 源三位頼政 経家朝臣 基輔朝臣 資隆朝臣 仲綱 資

忠 顕昭 道因 丹後右府女房

判者 皇太后宮大夫入道 釈阿

一番 霞

左勝

皇太后宮大夫入道

1 やまたかみ峰のかけちを見わたせば岩も霞にうつもれにけり

右

大式入道

2 たちわたる春の霞もわかれぬはけぶりになるるしほがまの浦

左歌、山の霞岩をうづめるばかりなん。ことなる事見え侍らず。

右歌、しほがまの浦はすこしいふせき様にや侍らん。彼浦は、松のかげ波の気色、眺望かぎりなき所にぞ侍るなる。されば伊勢物語にも、我が御門六十余国の中にしほがまの浦に似たる所なかりけりとぞかき侍るめる。霞もわかれずけぶりになるところばかりいはるるは、浦もほいなくや侍らん。左の歌よろしきにはあらねど、一番の左なるによりて、勝と定め申す。

【通釈】

一番 霞 左勝

皇太后宮大夫入道

1 山が高いので、峰の険しい道を見渡すと、そびえる岩も、霞にすっかり隠されていた。

右

大式入道

2 一面の春霞も、それと見定めかねるのは、(藻塩を焼く)煙の絶えない塩竈の浦だ。

左の歌は、山の霞が岩を覆っていたと詠んだだけの作です。格別な取り柄は見られません。対する右の歌の塩竈の浦は、少々うっとうしい有様でしょうか。あの塩竈の浦は、松の形といい波の様子といい、眺望がこの上もなく優れた所だそうです。それで『伊勢物語』にも、「わが国の六十余国の中で、塩竈の浦に匹敵する景色の所はなかった」と書いているようです。霞も見定め難いほど(塩を焼く)煙の絶えないところだけを詠まれるのでは、塩竈の浦として不本意なことかと思われまます。(右歌はそういう難点があるので) 対する左の歌は、別によい歌ではないが、一番の左の歌であるところから、勝と判定します。

【注】○峰のかけち 峰の険しい道。「懸路」は、険しい山道。○わかれぬ 見定められぬ。「分く」は、判別する意。○しほがまの浦 塩竈の浦。陸奥の歌枕。今の宮城県の松島湾の支湾、塩竈湾の古名。

『古今集』東歌の「みちのくはいつくはあれどしほがまの浦こぐ舟の綱手かなしも」(二〇八八)などでも知られた所。「塩竈」の地名は、平安時代に製塩が盛んであったことに由来する。○わが御門六十余国「御門」は、ここでは天皇の治める国土。『延喜式』によれば当時六十余国二島があった。なお以下の引用は『伊勢物語』八十一段に見える。【考察】左の歌は、「峰の懸路」を見渡すと、「岩も霞にうづもれにけり」と、そびえる岩を押し包んだ春霞の様子を、言葉飾らず、のびやかに歌っている。作者の俊成は、歌合の歌はおおらかに詠むのがよいと考えていたらしいことが、多くの判詞から察せられるが、この歌

などもその考えを実践したものであろう。

右の歌は、「立ちわたる春の霞」を見定めかねる場合として、藻塩を焼くために「煙になる塩竈の浦」をとり上げる、着想上の工夫を見せている。こういう着想は、谷山茂氏が日本古典文学大系『歌合集』に指摘されるとおり、古歌に学んで工夫を加えたものかと思われる。すなわち次のような古歌がある。

浦近く立つ秋霧は藻塩焼く煙とのみぞ見えわたりける(『寛平御

時后宮歌合』七九。『後撰集』二七三、よみ人しらず)

藻塩焼く煙になる須磨のあまは秋立つ霧もわかずやあるらん

(『拾遺集』一〇九六、よみ人しらず)

これらの歌の発想に基づき、秋霧を春霞に換えて詠んだのが、重家の次の歌と見られる。

たちわたる春の霞を須磨のあまはおのが藻塩の煙とや見る(仁安

二年『清輔朝臣歌合』、『重家集』三三二)

そして、この一首にさらに手を加え、場所を須磨に換えて塩竈の浦として詠んだ霞の歌が、大式入道(重家)の右歌、

たちわたる春の霞もわかれぬはけぶりになる塩竈の浦

であったと考えられる。

俊成の判詞は、自作の左歌については、山の霞が岩をうづめたと言ただけの作で、別に取り柄はないと言う。

右歌については、詠まれた塩竈の浦は「すこしいぶせき様にや侍らん」と批評し、『伊勢物語』(八十一段)にも全国で似た所のない景勝の地とするのに、塩を焼く煙の絶えない点のみを詠んだことを問題視している。そして、そのことを踏まえて、対する自作の左歌を、「よろしきにはあらねど」とことわった上で勝と判定する。

その場合、自作が一番左歌なので勝としたとも俊成は言っている。これは、そういう歌合独特の評価の慣例によったとするらしいが、この慣例は歴史的に見て、ある程度用いられた形跡が認められるけれども、絶対的な基準ではなかった。俊成が判者を務めた近い例で見ると、

嘉応二年（一一七〇）の『建春門院北面歌合』では、一番左が公通の歌、右が俊成の歌だが、俊成は持と判定している。それに比べると、この『右大臣家歌合』で俊成が自作を「一番の左なるによりて」勝とするというのは、いささか手前勝手と見られないでもない。ただし左右の歌自体を比較した場合、左歌の方が高く評価されること自体は、誤りではあるまいと思う。

二番

左勝

女房

3 霞しく春のしほちを見わたせばみどりを分くるおきつしらなみ
源三位頼政

右

4 あづまぢを朝たちゆけばかつしかやまの継橋霞みわたれり

左歌、いとをかしこそ見え侍れ。春の霞、蒼海のうへにひきわたるさま、あさみどり色をそへたるに、おきつ白なみたちわけたらむほど、面影おぼえ侍れ。右歌、かつしかやといへる、彼まのつき橋やまずかよはんといへる万葉集の歌をおもひて、東路のかすみおもひやられて、こころぼそく覚え侍れど、歌のすがたはしひてことならぬなるべし。なほ、みどりを分くるおきつしらなみは、たちまさりて侍る。

裏書云、あのおとせずゆかんこまもがかつしかのままのつきはしやまずかよはん

【通釈】

二番 左勝

女房

3 霞の広がる、春の潮路を見渡すと、一面の緑を分けて沖に白波が立つ。

右

源三位頼政

4 東路を、朝、出掛けて行くと、葛飾の真間の継橋の辺りは一帯に霞んでいた。

左の歌は、大層面白いと思われます。春霞が青い海の上に広くたなびいている状態で、薄い青色を加えているところを、沖の白波

が立ち隔てたと見える様子が、面影として思い浮かべられるのです。右の歌で、「葛飾や」と詠んだのは、あの「真間の継ぎ橋やまず通はん」と詠んだ『万葉集』の歌が心に浮かび、東路の霞が思いやられて、心細い気がするのですが、歌の姿はとりたてて際立ったものではないでしょう。やはり、（左の）「緑を分くる沖つ白波」の歌の方が、立ちまさっていると思います。裏書きに記す歌、「足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はん」

【注】○霞しく、霞が一面に広がる。○しほち 潮路。海流の流れる道筋の意から、海上、海原の意にも用いられた。○みどり 今日言う「みどり」（青と黄の間色）の外に、青、藍の色も含めて広く表わす語であったらしい。空や海の色を表わすのにも用いられている。○あづまぢ 東路。都から東国に行く道筋。○かつしかやまの継橋 葛飾や真間の継橋。下総の国の歌枕。「葛飾」は、今の東京都の東部から千葉県の西部などにわたる、江戸川下流一帯の地。「真間」は、今の千葉県市川市真間町の辺り。「継橋」は、川の中の所々に柱を立て、その上に板を継ぎ足して渡した橋。『万葉集』東歌に「足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はん」（三四〇五）と詠まれている。○面影 おもかけ。視覚的に思い浮かべられるイメージ。後に「おぼゆ」「あり」などの語を添え、歌の特長を示す評語として、俊成が判詞に使い生かしたと思われる。なお「考察」でも触れる。

【考察】左の歌は、霞の立ちこめた春の潮路を見渡すと、「みどりを分くる沖つ白波」が眼前にあると詠む。のびやかな詠み様で、「みどり」と「白」の配合も印象的な一首と見える。なお、作者は「女房」とあるが、右大臣九条兼実の作である。

右の歌は、『万葉集』の東歌に歌われた「葛飾」の「真間の継橋」を歌材として、その一面に霞む様子を詠む。「霞みわたれり」の「わたる」は、「橋」の縁語である。

俊成の判詞は、左歌については、「いとをかしく」見えると言い、

特に海原に霞の立ちこめた青の世界を白波が分けるイメージに注目して、「面影おぼえ侍れ」と評している。

この「面影」の語を用いて歌の視覚的なイメージの面での特長を示すことは、俊成に始まるようである。俊成はこの「面影」の語を、これ以前には『広田社歌合』と『別雷社歌合』の判詞に各一例用いているが、当面の『右大臣家歌合』では外に十一番の判詞にも用い、俊成の一生を通じて合計十五例ほどの用例を残している。そして、こういう「面影」に注目して歌を見る観点は、後に定家などにも受け継がれてゆくの、歌論史上注目されると思う。

一方、右歌については俊成は、その用語から『万葉集』の東歌を思い浮かべ、東路の霞が思いやられて「心細く」は感じるが、歌の姿は際立ったものではないと評する。この「心細く」は、肯定的な評語であろう。ただ左右を比べると、左が勝るとしている。

【備考】一番左歌は『千載集』（八）に収められている。

三番

左持

5 たちかへりくるとしなみやこえぬらん霞かかれるすゑのまつ山

右

仲綱

6 みつしほにかくれぬ沖のはなれ石かすみにしづむ春のあけほの

左、末松山に年をこし浪をかくる事、つねのことなる様に侍れど、すがた詞優に侍るなるべし。右、こころもめづらしく侍るを、はなれ石やことに見所ある物に侍らざらむ。末松山はをかきし所のめなれたる様に侍る。はなれ石、かど有りて珍し。ことなる事なきにやとて、これをなずらへて持と申すべし。

【通釈】

三番

左持

寂蓮

5 また訪れた新しい年が、越えてきたのであろうか、霞のかかっている末の松山よ。

右

仲綱

6 満ち潮に隠れない沖の離れ岩が、霞に深く包まれてしまった、春のあけほのよ。

左の歌は、末の松山で新年を迎える趣で、波を掛けて詠むのは、珍しくないことのようにですが、歌の姿や言葉の優美な作でしょう。それに対して右の歌は、着想は目新しいのですが、離れ岩というもののはさして見所のある歌材ではないでしょう。（左の）末の松山の歌は、興味ある所の、見慣れた様子の子作です。対する（右の）離れ岩の歌は、才気があって目新しい。ただ際立った特長というほどではないだろうかと思うので、左右を同列に置いて持と判定しましょう。

【注】○たちかへりくるとしなみ また巡ってくる新しい年。「年波」は、「年」を波に例えて言う語で、ここではその「波」が「たち」「かへり」との縁語関係を作る。○すゑのまつ山 末の松山。陸奥の国の歌枕。今の宮城県多賀城市八幡、末松山宝国寺の裏山の辺りと伝えられるが、定かでない。『古今集』東歌の「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（一〇九三）を初め、多くの歌に詠まれる。○はなれ石 「離れ岩」のことであろう。海中などに孤立した岩。○かど有りて 気のきいたとらえ方がされていて。「かど」は才覚の意が中心だが、「角」の心で「石」（岩）に縁をもたせた表現であろう。

【考察】左の歌は、歌枕「末の松山」を取り入れ、そこを新しい年が越えたのか、霞がかかっていると詠む。一般にこの「末の松山」を詠み入れる歌は、初めは『古今集』の東歌、

君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ（一〇九三）

の一首の影響を受け、恋の歌として詠まれることが多かった。それに比べて、季の歌として「末の松山」を詠むことは、冬の歌に仕立てた少数の例にとどまる状況が長く続いている。しかし平安時代も末に近づくと、次のような俊頼の歌などから、霞を配って春の歌として詠む

傾向が新しく生まれている。

いつしかと末の松山かすめるは波とともにや春も越ゆらん（『散木奇歌集』五）

この俊頼の歌と、当面の左歌とを比べてみると、主な語句の配置が上下の句で逆になっているが、発想上共通するところがあるのが認められる。

右の歌は、満ち潮にも隠れない「沖の離れ石」が、春のあけぼの、霞の奥に沈んで見えない由を詠む。「離れ石」という言葉は、作者仲綱の父頼政の家集（四二五）にも用例はあるが、あまり歌には使われなかった語で、それを霞の歌の材料に生かそうとした着想に特色の認められる作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、着想は新しさに欠けるようだが、歌の姿や言葉が優美であると評し、右歌については、「離れ石」は見所のある歌材とは言いが、それを用いた着想上の工夫は目新しさがあるとして、持と判定している。

四番 花 左持

女房

7 みな人のわがものがほにおもふかな花こそぬしは定めざりけれ

右

大式入道

8 春のうちは吉野の山のみねならぬ心も花になりけるかな

左歌、旨趣珍重、事理叶へり。但上五七の句聊俗にちかくや侍らむ。右、よし野のやまの峰ならぬなどをかしく侍るを、心も花にといへるや、あだなるさまの花心になれるなんと聞え侍る。歌のころは花より外の他事なくなんあるといへるなるべし。左歌下句ことよろし。右は上句をかしく侍り。為持。

【通釈】

四番 花 左持

女房

7 人は皆、花を我が物のように思う、——花から言えば、あるじはだれとも、決めていないのだが。

右

大式入道

8 春の間は、吉野の山の峰でもないのに、心が花で占められてしまった。

左の歌は、趣旨が優れ、道理に合った作である。ただ歌の初めの一二句は、いささか俗に近い言葉遣いと言えるでしょうか。右の歌は、「吉野の山の峰ならぬ（心）」などと詠んだのが面白く思われますが、「心も花に（なりにけるかな）」と言ったのは、かりそめの花心（移りやすい心）になったという風に誤解されると思います。この歌の真意は、花以外のことには心にないと詠んだのでしよう。左の歌は下の句が特に結構です。右の歌は上の句が面白いと思います。それで持とする。

【注】○みな人 すべての人。○吉野の山 「吉野」は大和の国の歌枕。今の奈良県吉野郡一帯の地。『万葉集』では吉野は山より川が多く詠まれているが、平安時代になると吉野山の歌もふえる。ただ初めは隠栖にふさわしい山といった見方が主流で、その花を詠んだ歌は『古今集』以下にも見えるが、花の名所として歌われるのは平安時代後期になってからのことになる。○聊 いささか。○花心 移りやすい心。

【考察】左の歌は、人は皆花を「我が物顔に」思うが、花はだれかを主と定めるわけもないと詠む。人の花への愛着を、花の立場に立つてとらえた点に特色が見られる。

右の歌は、春には「吉野の山の峰」でもないのに「心」が「花」になったと詠む。花のみが心を占める状態を、花の咲き満ちた吉野山の峰になぞらえた作であろう。

俊成の判詞は、そういう左右の歌それぞれに着想上の工夫を評価しているようである。しかし問題点も挙げ、左の歌については、「みな人のわがもの顔に」という言い様を、「いささか俗に近」と批判する。また右の歌については、「心も花になりにけるかな」という表現は、「あだなるさまの花心になれる」とことと誤解される恐れがあると指摘する。これは、次のような『古今集』仮名序の一節を意識した指

摘と思われる。

今の世の中、色につき、人の心花になりけるより、あだなる歌、はかなきことのみいでくれば、

五番 左持

隆信朝臣

9世をいとふすみかときけど春にあふ花もさきけりみよし野のやま

右

道因法師

10わがやどの花をや風にゆづらましぬしとなりなば惜むばかりに

左右両首ともに心詞をかしくは侍るを、左は、みよし野の山を世をいとふ住家とばかりはききおきて、はる花さく所とすることのおそかりけるにやとぞきき侍る。右、花をや風にゆづらましとまでおもひよれるは、花ををしむ心もふかく侍るを、ゆづらましとおきてぬしとなりなばといへる詞や、すこしけなる様に侍らん。共に勝負不分明。仍為持。

【通釈】

五番 左持

隆信朝臣

9世をいとい、逃れ住む所と聞いたが、吉野山は、春になると花がきれいに咲いた。

右

道因法師

10わが家の花を、風に譲ろうかと思う、——(風も)持ち主になつたら、ひたすら花(の散るの)を惜しむはずだから。

左右の二首は、ともに心言葉が面白くは見えますが、左の歌は、吉野山のことを俗世を避けて住む所とだけは聞いておいて、春に花の咲く所と知るのが遅れたのだろうかと思われまます。右の歌は、花を風にゆだねようという気になつたのは、花を大事にする心も深いと感じますが、「ゆづらまし」と言つて「ぬしとなりなば」と続けた言葉運びは、少々日常風になつていてどうでしょうか。

左右の歌はともに勝負が明白につけられない。そのため持とする。【注】○世をいとふ 俗世をいとい逃れる。○みよし野のやま 「みよ

し野」の「み」は美称の接頭語。「よし野の山」は、四番の「注」参照。○けなる 「け」は、日常的事であること。正式を意味する「晴れ」に対する語。

【考察】左の歌は、吉野山は「世をいとふすみか」と聞いたが、春には花が美しく咲いたと詠む。吉野山を俗世をいとい隠れ住むにふさわしい所と見る見方は古く、

み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ
〔古今集〕九五〇、よみ人しらず)

などと詠まれていた。左歌は、その吉野の山にも、春は花が美しく咲くのを発見した心であろう。

右の歌は、我が家の花を風に譲り渡そうと思うと上句に詠み、その理由を下句に、風も花の主となれば惜しんで散らさないであろうと詠む。まず意表をつく見方を上句に挙げ、下句にその理由を示すという、着想上の趣向によつた作である。

俊成の判詞は、左右の歌が「ともに心詞をかしく」と評価した上で、問題点にも触れている。左歌については、吉野山を花の咲く所と知るのが遅すぎると批判したのであろう。右歌については、「ゆづらまし」に続けて「ぬしとなりなば」と言つた言葉運びが、少し「けなる様」だと言っている。これは、所有権に関するような日常生活臭を感じさせる言い様だと問題視したのであろう。

六番

左勝

寂蓮

11 たづねきて花見ぬ人やおもふらん吉野のおくをふかきものとは

右

顕昭

12 あやしさに尋ねて花としりぬればよそめうれしき峰の白雲

左歌、ことばに花とおき、吉野の山のふかさあさをいへらん様にこそきこゆれど、花をたづねて見は、心ざしのふかきゆゑに芳野山もふかくするなどおぼゆると待るめり。右歌、たづねて花としりぬればと待るには、あはざりけりと聞ゆるほどに、よそめう

れしきといへる、花はまことの雲も有りけるにや。上下たがひたるやうにきこゆ。あやしきにおける初の句も優にしあらぬにや。左よろしきににたり。可勝。

【通釈】

六番 左勝

寂蓮

11 吉野に花を尋ねて来て、花を見ない人は、(山に分け入るにつけ) 思うことだろうか、——吉野の奥を深いものだ。

右

顕昭

12 (本当に雲か) 不審に思い尋ねて来て、花と知ったので、よそ目に峰の白雲と見えたのが、うれしいことになった。

左の歌は、言葉に「花」と言いながら、吉野山の深さ浅さを詠んだように思われるけれど、花を尋ねて見る場合、花への志が深いため(山に分け入ると)、吉野山も深いところを示すと思われると詠んでいるようです。右の歌は、「尋ねて花と知りぬれば」とありますので、白雲には出合わなかったと思われたところ、「よそ目うれしき(峰の白雲)」と詠んでいるので、花の中には本物の雲も混じっていたのだろうか。上下の句が内容上くい違っているように思われる。「あやしきに」と言った初めの句も優美さに欠けるであろうか。対する左の歌はわるくないように思う。左の勝とする。

【注】○吉野 四番の「注」参照。○よそ目 よそながら見ること。

ここでは、特に遠くから見えて見違える意で用いたか。

【考察】左の歌は、吉野の花を尋ねて見ない人は、吉野の奥を深いものと思うであろうかと詠む。これはその作意を推測すると、吉野の花を尋ねて来て花を見なかった人は、山に分け入って花を求めるにつけ、奥が深いと思うことだろうか、といった心であろうか。

右の歌は、「よそ目」に「峰の白雲」かと思たが、なお不審なので尋ねて来たところ、花と分かったので、初めの「よそ目」はうれしくも誤解だったとの心かと思う。

俊成の判詞の内、左歌に関する部分の本文は、異文を含めて意味が通じ難いところがあるが、当面底本の本文によって「通釈」のように解してみた。その場合、左歌は、吉野の花を尋ねて山に分け入る人の志の深さに応じて、吉野山も奥深さを示すらしいと詠んだと見られているようである。そういう見方に基づいて、「左よろしきに似たり」と最後に評価したかと思う。

一方、俊成は右歌については、「峰の白雲」を尋ねて行って「あはざりけり」と見られるのに、「よそ目うれしき峰の白雲」と言うのは、花の中に雲も混じっていたのか、上句と下句が矛盾すると批判しているようだ。しかし、花の題の歌に、それほど雲にこだわって詠むことは、通常考えにくいのではないか。右歌の作意は、多少表現上の不備があるとしても、先に記したように解するのが普通ではなからうか。その点でこの俊成の受け取り方は、誤解か曲解の気味がありはしないかと思う。

このように見てくると、この場合の俊成の判詞は、左歌に比べて右歌にきびしい態度をとっているように思われる。これは、左歌の作者が御子左家側の寂蓮で、右歌の作者が六条藤家の顕昭である点が、俊成の判詞に影響したかとも思われるが、いかがであろう。

七番 郭公

左持

皇太后宮大夫入道

13 すぎぬるか夜はのねざめの子規声は枕にあるこちして

右

資隆朝臣

14 ほととぎす過ぐる声をやとどむると雲路にいかで関をすゑまし
子規の歌に、雲路に関をすゑましかばといへる心、ちかうもきき
なれ侍る。声をやとどむなどいへるは、いますこし^{有りがたくや(刈谷)}
^{図書本}ぞ聞ゆ。姿はをかしくこそ侍れ。左歌、宜しからずこそ侍らめ。
且は依れ例不能^二勝負^一。

【通釈】

七番 郭公 左持

皇太后宮大夫入道

13 通り過ぎたか、夜半の寝覚めに聞くほととぎすは。——声はまだ枕元に残る気がするが。

右 資隆朝臣

14 ほととぎすの、過ぎて行く声を、引き止められるなら、雲路にどうか関を置きたい。

(右歌について言えば、)ほととぎすの歌で、雲路に関を置けるならと詠んだ心は、近いころにも聞き慣れています。ほととぎすの「有りがたくや声をやとどむる」などと詠んでいるのは、いささか実現のむずかしいことかと思われる。歌の姿は面白いと思います。左の歌は、出来のよくない作でしょう。また、(それは判者の私の歌なので)先例によって勝負を判定することができません。

【注】○郭公 ほととぎす。漢字表記には、郭公・子規・時鳥・杜鵑・霍公鳥・不如帰その他多様な漢字が用いられる。中形の鳥で、初夏に日本に渡来し、八・九月ごろ南方へ去る。特に鳴く声に印象深く受けとられ、古来夏の景物として親しまれた。和歌では『万葉集』のころから多く詠まれ、『古今集』では夏の歌の大部分を占める歌材になっている。歌合でも、古く『民部卿家歌合』に歌題とされる。○雲路 雲の中の道。鳥とか月とかが通るとされた。○依例不能勝負 先例に従って、勝負を判定することができない。歌合で判者が作者でもある場合は、自作に判を加えない先例に従うというのである。このことは清輔の『袋草紙』には、「判者為作者之時、至我歌者不判。故実歟。但人々心々也。」と見える。

【考察】左の歌は、夜半ふと目覚めて声を聞いたほととぎすについて、まず「過ぎぬるか」と言い、後に「声は枕にある心地して」と言い添える形で詠んでいる。特別な趣向を用いず、ほととぎすの声に接しての感想をそのまま並べたとも見えるが、鳥の速い動きに伴う瞬時の声の印象がとらえられているようだ。歌の調べはなだらかでも、単調ではなく、五、七五、七七と切れて、各部分の示すイメージが適切に重ねられているかと思う。

右の歌は、飛び去るほととぎすの声を愛惜する心で、引き止められるなら雲路に関を置きたいと詠む。これは雲路に関を置くという趣向に特色を示そうとした作であろう。ただし似た着想をもつ次のような先行歌がある。

ほととぎす鳴く一声のあかなくに過ぐる雲路の関とならばや
〔重家朝臣家歌合〕郭公三番右、弁)

この一首の着想を右歌は借りたものであろう。
俊成が判詞に、右歌の「雲路に関を」置きたいと詠んだ心を「近うも聞きなれ侍る」と評したのも、『重家朝臣家歌合』でも判者を務めた俊成として、この弁の一首が念頭にあったためであろう。すると、右歌で関を置いて声を引き止めると詠んだのを俊成が評した本文に「有りたくや」「有りがたくや」の異文がある点は、『重家朝臣家歌合』で俊成が「有りがたきこと」と評しているのと同様とすれば、「有りがたくや」と見る方がよいかと思う。

俊成は左歌については、自作であるだけに、「宜しからずこそ侍らめ」と謙遜して記しているが、後に『千載集』に収めているから、自信のある作であったかと思う。勝負の判定は、先例に従って避けると言っている。これは「注」で触れたように、判者が歌の作者である場合判定しない先例に従うというのである。俊成はこの先例に従うことを時によって実行したり実行しなかったりしているが、この場合は先例を盾に判定を避けたかと思われる。

【備考】七番左歌は『千載集』(一六五)に収められている。

八番 左勝 行頼朝臣

15 ほととぎす鳴きゆくかたをたづぬればはな橋のもとにきにけり

右 基輔朝臣

16 忍びねに里なれそむるほととぎすきかぬがほにてまた名のらせん
左、子規にはなたちばなどは、めづらしき心はあらねども、姿ことばことなる事なく優に待るめり。右、心はをかしく、里なれ

そむるなどいへるわたりも優には侍るを、時鳥にきかぬがほにて
又なのらせん事ぞいかかと覚え侍る。左可勝。

【通釈】

八番 左勝

行頼朝臣

15 ほととぎすの、鳴いて去った方を尋ねて行くと、花橘のもとに来た
のだった。

右

基輔朝臣

16 忍び音で鳴く、里に慣れ始めたほととぎすは、聞かぬふりをして、
もう一度鳴かせようと思う。

左の歌で、ほととぎすに花橘を取り合わせなどしたのは、目新
しい着想ではないけれども、歌の姿言葉は目立つところがなく優
美に詠まれていようです。右の歌は、着想は面白く、「里慣れ
そむる」などと言ったあたりも優美なのですが、ほととぎすに対
して「聞かぬがほにて又名乗らせん」というのは、どうかと思わ
れます。左の勝であろう。

【注】○はな橘 花橘。花の咲いている橘。橘の花。橘は常緑低木で、
初夏に白い五弁の花を開く。ほととぎすと取り合わせて歌に詠むこと
は、『万葉集』以来行なわれている。○忍びね 忍び音。四月ごろに
聞くほととぎすの音が、本格的に鳴く前で、声をひそめた鳴き声に聞
こえるの言う。○きかぬがほにて 聞かないふりをして。○名のら
せん 鳴かせよう。「名のる」は、ここでは鳥がその存在を知らせて
鳴く意で言う。

【考察】左の歌は、ほととぎすの鳴いて行った方を尋ねてゆくと、花
橘のもとに着いたと詠む。ほととぎすと花橘を結びつけることは、共
に常世に縁があると思われたのによるとも言われるが、いずれも初夏
の代表的な風物なので、配合して歌に詠むことが一般化したと思われ
る。左歌はその伝統を受けて、平明にのびやかに詠まれているよう
である。

右の歌は、山から里に出て日が浅く、「忍び音」で鳴くと思われた

ほととぎすについて、「聞かぬがほにてまた名のらせん」と詠む。忍
び音が聞こえなかったふりをして今一度ほととぎすに鳴かせようとい
うので、ほととぎすを擬人的に扱う趣向によっている。

この右歌は、西行の作として伝えられる次の歌と類似している。

里なるるたそがれ時のほととぎす聞かずがほにてまた名のらせん

『山家集』一八一

右歌の「忍びね」と西行の歌の「たそがれ時」が異なる程度の違いで、
二首はよく似ている。ではどちらが先に詠まれたかという点は、西行
の歌の制作時期が判明しないので、確かには言い難いけれど、『山家
集』の原型の成立時期として一般に推測されているところなどを参照
すれば、西行の歌が先行する可能性が考えられる。

俊成の判詞は、左歌については、ほととぎすと花橘の取り合わせを
基調とした着想を、目新しいものではないと言う一方、歌の姿言葉は
目立つ点がなく「優」であると評価する。

右歌については、全体として着想は「をかしく」、また「里なれそ
むる」などと詠んだ言葉遣いも「優」であると評価するが、ほととぎ
すに「聞かぬがほにて又名のらせん」と詠んだのを、「いかかと覚え
侍る」と問題視している。実現されないことが余りにも明白な状況を
設定した趣向を、小細工と見て批判したものであろうか。対する左歌
を勝としている。

九番 月 左持

隆信朝臣

17 雲はるるみかさのやまの月影はさしのぼるよりさやけかりけり

右

丹後

18 ひさかたのあまの河よりながれきてなほしも水にやどる月かな
左、心詞あひかなひて侍り。三笠のやまの月さしのぼるなどぞ、
目なれておぼゆる。右、なほしも水にやどる末の句、ことによる
しく見え侍るを、中の五文字のをしまれまほしく聞え侍るなり。
左はことなる難なく、右は末をかしく、持とすべし。

裏書云、法性寺殿内大臣の時の歌合に、山月

神のますみかさのやまの月影はゆふかけてしもさしのぼるかな

【通釈】

九番 月 左持

隆信朝臣

17 雲の晴れた、三笠山みかさの空にかかる月は、昇る時から清らかに澄んでいた。

右

丹後

18 遠く天の河を流れてきて、なおこの水に映っている月よ。

左の歌は、心と言葉がふさわしく詠まれていきます。(ただし)「三笠の山の月」が「さしのぼる」などという(縁語による)表現は、見慣れたものと思われまゝ。右の歌は、「なほしも水に宿る月かな」という下の句が、特に結構に見えますが、中の五文字の句は大切にされたいように思われるのです。左の歌は目立った欠点がなく、右の歌は下の句が面白く思われるので、持としよう。裏書きに記す。法性寺殿内大臣の時の歌合に、「山月」の題で詠まれた歌、

神のますみかさの山の月影はゆふかけてしもさしのぼるかな

【注】○みかさの山 三笠山(御蓋山)は、大和の国の歌枕。今の奈良市街の東部にあり、『万葉集』以来歌に多く詠まれている。その西のふもとに春日大社かすががある。○さしのぼる 「さし」は接頭語であるが、この歌では「み笠の山」と「笠」を「さす」と言うところから縁語になる。○ひさかたの天の河 「ひさかたの」は枕詞。「天の河」は銀河。○中の五文字 歌の第三句。「ながれきて」を言う。○をし まれまほしく 「をしまれ」は、群書類従本その他「をしはれ」と見えるが、意味が通じにくい。当面動詞「をしむ」を中心に、大切にされたいとの意を示したと見ておく。○法性寺殿内大臣の時の歌合 「法性寺殿」は、藤原忠通。内大臣で関白になった藤原忠通が、保安二年(一一二二)九月十二日、自邸で催した歌合。『関白内大臣家歌合』等の名で呼ばれる。○神のますみかさの山の月影は…… 上記

『関白内大臣家歌合』山月三番左に「神のますみかさの山に月影の……」の形で見える、忠通の歌。これは左歌に対する判詞に「目なれておぼゆる」と言ったことに関して、例として挙げたのであろう。

【考察】左の歌は、三笠山の上に昇って澄む月の清らかさを、情景に即して端的に詠んでいるようだが、「み笠の山」と「さし昇る」を縁語にする程度の技巧は用いている。もっとも、こういう技巧は古くから用いられてきたもので、判詞の末尾に見える保安二年『関白内大臣家歌合』の忠通の歌では、次のように詠まれている。

神のますみかさの山に月影のゆふかけてしもさしのぼるかな(山月三番左)

この一首は、当面の縁語の使用も含めて、全体として左歌とよく似た先行歌である点が注目される。多分左歌はその影響を受けているであろう。ただ多少違った特色も見られる。忠通の歌が「神のますみ笠の山」と言う縁で、「夕かけて」に「木綿ゆふかけて」の心も含め、巧みな修辞技巧を用いているのに比べて、隆信の左歌は単純な詠み様と見えるが、その結果として、詠まれた月のさやけさが強く印象づけられるところもあるかと思う。

右の歌は、月が天の河を流れるという発想で、その月が下界でなお「水に宿る」と詠む。この月が天の河を流れるという発想は、早く『古今集』の、次のような歌に先例がある。

天の河雲の水脈をにてはやければ光とどめず月ぞ流るる(八八二、よみ人しらず)

さらに『後撰集』には、次のような歌がある。

天の河水まさるらし夏の夜は流るる月のよどむ間もなし(一一〇、よみ人しらず)

天の河しがらみかけてとどめなんあかず流るる月やよどむと(三二九、よみ人しらず)

秋風に浪や立つらん天の河渡る瀬もなく月の流るる(三三〇、よみ人しらず)

てる月の流るる見れば天の河いづるみなとは海にぞありける（一三六三、貫之）

これらの歌の中では、月の流れる天の河を下界の海につなげる発想が、最後に引いた貫之の歌に見られるが、丹後作の右歌もその系統を受けて、月が天の河を流れて来て下界の水に映っていると詠んだものである。

俊成の判詞は、左歌については、「心詞あひかなひ」と言い、「三笠山」に月が「さし昇る」という縁語の技巧は見慣れたものだが、全体として「ことなる難なく」と評する。

右歌については、下句「なほしも水に宿る月かな」を「ことによるしく」、「をかしく」などと評価している。第三句「流れきて」に対する文言は、問題点を挙げたものかと思われるが、「をしまれまほしく聞え」という本文自体の言葉を含めて、なお検討を要すると思う。

（この本文が正しいとして、第三句は大切にしたいと言ったと見れば、月の流れる「天の河」と下界で月の宿る水とをつなぐ言葉は、「流れきて」でよいのか、なお工夫を要すると指摘したと解すべきであろうか。）

十番

左持

别当局

19 てる月のすがたばかりはおもなれて影めづらしき秋のそらかな

右

道因法師

20 かぎりありていらん月をもちがせん山の端まではくもらずもがな
左、姿ばかりはおもなれてといへる、月のすがたなどはさきさき云ひなれてもおほえずや侍らん。末の句は優に侍る。右、上句は落月にやと見え侍る。末の句は東峰に出づるより西山にかたぶくまで曇らずもがなと、ただおほかたの事と聞え、当時月あかきには見え侍らず。但歌の姿はよろしく侍れば、これも又為持。

【通釈】

十番

左持

别当局

治承三年十月『右大臣家歌合』注釈

19 照る月の、姿だけはいつも見慣れているが、月の光がとりわけ（明るく澄んで）見事な秋の空よ。

右

道因法師

20 月が見る時が限られていて、いずれ沈むのは仕方がないが、せめて、山の端に隠れるまでは曇らないでほしい。

左の歌は、「姿ばかりはおもなれて」と詠んでいるが、月の姿などという言い様は、これまで言い慣れた言葉とは思われないものでしょうか。下の句は、優美です。右の歌で、上の句は沈もうとする月を詠んだものかと思えます。けれども下の句は、月が東の峰の上に出る時から、西の山に落ちかかるまで、曇らないでほしいと、ただ一般的なこととして言ったように思われ、月の沈もうとする時の明るさに関するものとは見られません。しかし歌の姿は結構に思いますので、この勝負も持とします。

【注】

○おもなれて 面慣れて。見慣れて。○山の端 山の端。稜線。

○落月 沈もうとする月。西に傾く月。○おほかたの事 全般的な事。

【考察】左の歌は、月の姿は見慣れているが、秋の空の月影は「めづらしき」ものに見えるのと詠む。秋は月影が特に明るく澄むので、それを新鮮で見事だと賞美したのであろう。

右の歌は、月がいずれ沈むのは仕方がないが、山の端に隠れるまでは曇らないでほしいと詠む。理屈が少し目立つようでもあるが、傾く月を愛惜する心を中心にした作である。

俊成の判詞は、左の歌については、「月の姿」という言葉が従来言い習わされていない点を問題視している。この言葉は全く前例がないわけではなく、『顕輔集』（一四二）に見えるような例もあるが、当時以前の一般的な状況は俊成の言うとおりであったと思われる。なお俊成は左歌の下句は「優」としている。

右の歌については、上句によれば月の傾く折の感想だが、下句では月が出てから沈むまでを通じての思いを詠んだと思われると指摘する。しかし歌の姿は「よろしく」見えると評し、持としている。

十一番 左

俊恵法師

21 てる月のすむべき夜半になりぬれば雲も心はありけるものを

右勝

源三位頼政

22 をちかたやあさづま山にてる月のひかりをよするしがのうらなみ

左歌、雲心なしとあるを、雲も心は有りけるものをといへる心はをかしくこそ侍れ。すむべき夜半になりぬればといへるや、八月十五夜九月十三夜などにや侍らん。これはことに名をえたる夜な夜な、そのほかは曇りてのみあらん様にやきこえ侍らむ。すむべき秋にといへらば、ひろく侍りなましとぞ見え侍る。右歌、をかたやとおきて、ひかりをよするしがの浦なみといへる末の句、面影おぼえていとよろしく侍るめれ。あさづま山はふるくもよめる所にはあれど、こひねがふべしとは見え侍らねど、なほしがのうら浪のひかりをよせたる心をかしく見え侍る。仍以右為勝。

【通釈】

十一番 左

俊恵法師

21 照る月が、澄むべき夜半になったのにつけ、雲も思いやる心はあったのだと思う。

右勝

源三位頼政

22 はるか遠く、浅妻山の上に照る月の、光を宿して打ち寄せる、志賀の浦波よ。

左の歌は、雲は心がないとされるのに対して、「雲も心はありけるものを」と詠んだ着想は面白いと思います。しかし、月の「澄むべき夜半になりぬれば」と詠んでいるのは、八月十五夜とか九月十三夜とかを言ったのでしょうか。これらはとくに有名な月夜だが、それ以外の夜はいつも曇っているように思われるでしょうか。そこで「澄むべき秋に（なりぬれば）」と言ったら、広く秋の夜に関することになるだろうと思われまます。右の歌は、初めに「遠方そちかたや」と言っておいて、「光をよする志賀の浦波」と詠んだ下の句は、その面影が思い浮かべられて、大層結構かと見えます。

浅妻山は古い歌にも詠んでいる所ではあるが、望んで詠み入れるべき地名とは見えませんけれど、やはり志賀の浦波が月の光を宿して寄せた心は面白いと思われまます。そのため右を勝とします。

【注】○あさづま山 浅妻山。近江の国の歌枕。琵琶湖の東岸、今の滋賀県坂田郡近江町の山。『万葉集』の浅妻山は大和の山で、近江の浅妻山の古い用例は少ないが、『兼盛集』の「浅妻の峰の木陰茂りあひて栄えゆく世を見るがたのしき」（一一五）は、大賞会の和歌で、近江の山を詠んだと見られる。○しがのうらなみ 「志賀の浦」は、近江の国の歌枕。琵琶湖の西南岸、今の大津市付近の湖辺。○雲心なし 陶淵明の「帰去来辞」に、「雲無心 以出岫」とある。○八月十五夜九月十三夜 秋の月を賞するのに適するとされた夜。ともに陰暦で、八月十五夜の月は「中秋の明月」、九月十三夜の月は「後の月」と言われた。前者は古代中国から伝来した見方によるが、後者は日本で生まれた見方。○面影 二番の「注」「考察」参照。

【考察】左の歌は、月の澄むべき夜半を迎えたにつけて、雲も心があって遠慮してくれたのだと思つた由を詠む。これは、例えば「帰去来辞」では雲を「無心」の存在とし、そういう見方が一般的だったと思われるのに対して、「雲も心は有りけるものを」と詠んで、趣向としたのであろう。

右の歌は、遠く浅妻山の上に照る月の、光を宿して打ち寄せる志賀の浦波よと詠む。これは叙景的な詠み様で、琵琶湖のかなたの山月を遠景に置き、月光を宿して寄せる志賀の浦波を近景として描き出している。地名を巧みに用いて大景をとらえた一首であらう。

俊成の判詞は、左歌については、心無しとされる雲を、心有るものとして詠み入れた着想は認め、「をかし」とする。しかし月の「澄むべき夜半に」は「澄むべき秋に」とした方が、歌の内容が広がって妥当だろうと、具体的な指摘をしている。適切な指摘であらう。

右歌については、特に下旬「光をよする志賀の浦波」に対して「面影おぼえて、いとよろしく」思われると評価している。この「面影お

ぼゆ」という評語は、先に二番の判詞にも用いられていたが、その考察の中でも触れたように、歌のイメージに関する評語として、歌の韻律あるいは声調に関する評語に対する位置を占める点で注目される。

十二番 紅葉

左持

俊恵法師

23 日をへつつしぐるるままに竜田山松のみどりののこりゆくかな

右

資隆朝臣

24 秋くればちぐさにそむるいとかやまふきなみだりそ木がらしの風

左歌、心有りては見え侍り。しぐるるままにたつたやまといへるに、紅葉さだめてあるらんとはおしはかられ侍れど、詞にもみぢの侍らぬこそ歌合にはいかがとおぼえ侍れ。松のみどりの残りゆかなといへる行の字も、しぐるるままにの詞にいひあはせておもふなどは見え侍れど、ゆくの詞や、松のみどりのことばにかなはず侍らんとおぼえ侍るうへに、津守国基歌に云、紅葉するかつらのなかにのなかに同基集のなかにすみよしの松のみひとりみどりなるかなといへる歌に、末の句いくばくかはらずや侍らむ。右歌、千種に染むるいとかやまは、いとすぐれてよろしく侍る。吹きなちらしそ山風のかぜといへる古今の歌に、吹きなみだりそ木枯の風、文字のおき様かはる所すくなくや侍らん。両首ともにめづらしきにはあらざるにやと覚え侍れば、持と申すべし。

【通釈】

十二番 紅葉

左持

俊恵法師

23 日数を重ね、時雨が降るにつれて、竜田山は（紅葉が散り）、松の緑の残るのが目立ってゆく。

右

資隆朝臣

24 秋が来ると、色とりどりに木の葉を染める糸鹿山は、吹き乱すな、木枯らしの風よ。

左の歌は、よく思い入れた作とは見えます。ただ、「しぐるるままに竜田山」と言っているから、紅葉が必ずやあることだろうと

は推量されますけれど、歌の言葉の上で紅葉がありませんのは、歌合の歌としてはどうかと思われれます。また「松の緑の残りゆくかな」と詠んでいる、その「ゆく」という語も（問題で）、これは「しぐるるままに」という言葉に応じて思い付いたのだろうなどと思われれますが、「ゆく」という語は、「松のみどり」の言葉にふさわしくないところがあるうかと考えられます。その上、津守国基の歌に、「紅葉する桂の山中にに住吉同基集の松のみひとりみどりなるかな」と詠んでいるが、下の句はその歌といくらも変わっていないだろうかと思うのです。右の歌の、「千種ちくさに染むる糸鹿山いと」は、大層優れた詠み方で、結構に思えます。ただ（下の句は）、「吹きな散らしそ山おろしの風」と詠んだ『古今集』の歌に対して、「吹きな乱りそ木枯らしの風」というのは、言葉の置き様の上で違いが少なすぎるうかと思えます。この左右の二首は、ともに目新しい作とは見なし難いだろうかと思われれますので、持と申しておきましょう。

【注】○竜田山 立田山とも。大和の国の歌枕。今の奈良県の西北部、大阪府との境、生駒山地の南端の山。紅葉の名所。谷山茂氏は、ここでは紅葉の錦を「裁つ」との掛詞とされる。○ちぐさ 千種。種類の多いこと。○いとかやま 糸鹿山。紀伊の国の歌枕。今の和歌山県有田市の東南部の山。「糸」に関する縁語関係を用いて詠まれることが多い。右歌の場合も「そむる」「みだり」と縁語関係を作る。○ふきなみだりそ 吹いて乱すな。この場合「みだり」は、乱す意の他動詞「みだる」の連用形。○木がらしの風 木を吹き枯らす風。その季節は、秋にも冬にも詠まれていて、『千載集』でも「こがらし」を詠み入れた歌は、秋の部にも冬の部にも見える。○津守国基の歌 津守国基は、住吉社神官で、その歌は、勅撰集には『後拾遺集』初出。一〇二二—一〇二二。俊成がここで判詞に引く国基の紅葉の歌は、『国基集』（二一八）、『後拾遺集』（九八七）に、第二句「桂のなかに」の形で見える。○吹きなちらしそ山風のかぜといへる古今の歌 「こひし

くは見てもしのばむもみち葉を吹きなちらしそ山おろしの風」(『古今集』二八五、よみ人しらす)

【考察】左の歌は、時雨の降る日が重なるにつれて、竜田山は松の緑の残るのが目立ってゆくと詠む。その特色は、題の紅葉を言葉として詠み入れずに、おのずと伝わるような詠み様、いわゆる「題をまはす」詠み様をしていることであろう。この詠み様については『俊頼髓脳』に説明されているが、それによると、題詠の場合、題の文字には「心をまはして詠むべき文字」と「ただあらはに詠むべき文字」とがあり、その区別は作者自身がさとする外はないとされる。当面の左歌の場合は、紅葉の名所の竜田山で、時雨が続くにつれて松の緑の残るのが目立つと言え、紅葉を言葉に出さなくてもよいとも思われるが、俊成の判詞では「歌合にはいかが」と疑問視している。これは歌合の歌は題の心を確かに表現すべきものとする原則を重視したのである。これと同様の見方は、九年前の『建春門院北面歌合』(関路落葉十番)の俊成の判詞にも示されていたところで、俊成としては一貫してこの見方をとり続けていることが知られる。

右の歌は、秋になって色とりどりにもみじした糸鹿山を、吹き乱すなど木枯らしの風に呼び掛ける形をとって詠む。糸鹿山を詠み入れる歌が一般に用いる「糸」に関する縁語の技巧として、ここでは「染むる」「乱り」などの語を織りこんでいる。

俊成の判詞は、左歌については、「心有りて」は見えると評する一方で、問題点を幾つか指摘している。その一つは、先に触れたように題の「紅葉」を直接示す言葉を欠く点である。また下句「松の緑の残りゆくかな」の「ゆく」の語を取り上げ、「松の緑の言葉にかなはず」と言っているが、これは常緑の松の本意として不易性を意識することによるのであろう。またこの下句自体が、津守国基の歌の下句「松のみひとり緑なるかな」に類似するとも指摘している。

右歌については、「ちぐさに染むる糸鹿山」という表現を「いとすぐれてよろしく」と評価する一方、下句「吹きなみだりそ木枯らしの

風」が『古今集』の歌(二八五)の下句「吹きなちらしそ山おろしの風」に類似すると指摘する。そして左右の二首はともに「めづらしきにはあらざるにや」と言い、持としている。

十三番 左持 良清

25 たつたやま時雨ふりにしむかしより梢ぞ秋をわすれざりける

右

基輔朝臣

26 おも影にとまるはかひもなかりけり梢にちらぬ紅葉ともがな

左歌こそ何ともえころえ侍らね。もし、時雨ふりおけるならの葉の名におふみやのふることぞこれといへる歌を思ひて、ならの御ときたつた山の紅葉御覧じける事などをやおもへる人にや侍らん。こずゑぞ秋を忘れざりけるなどいへるも、ふもとぎまなどはいかになりけるにかとこそ聞え侍れ。これも紅葉をまはしてよめるにや侍らん。右、歌ざまふるまひはをかしく侍るを、俤にとまるはかひもなし、梢にちらぬ紅葉ともがなといへる事、おろかなる事こそおぼえ侍れ。左は歌のたけあるやうにて聞知るに及ばず侍るほどに、これもおなじほどと申すべきにや侍らん。

【通釈】

十三番 左持 良清

25 竜田山は、時雨が降ったと歌われる古い(奈良の都の)昔から、こずえが秋を忘れないで(紅葉して)いたことだ。

右

基輔朝臣

26 面影として残るのでは、もの足りない、——実際にこずえに散らず残る紅葉であってほしい。

左の歌は、何とも理解に苦しむ作です。あるいは作者は、「(神無月)時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮の古ごとぞこれ」と詠んだ歌を念頭に置いて、奈良の宮のみ代に、みかどが竜田山の紅葉をご覧になったということなどを思った人なのでしょうか。「こずゑぞ秋を忘れざりける」などと詠んでいるのも、ふもとの

様子などはどうだったのかと思われます。またこの歌も(十二番左歌と同様)題の紅葉を(歌の言葉に出さず)遠回しに詠んだ作だろうかと思えます。右の歌は、歌の姿、歌い様は面白いのですが、面影として残るのでは意味がない、「こずゑに散らぬ紅葉ともがな」と詠んでいるのは、未熟なことと思われるのです。左の歌は歌の格調が高いように見えるが、よく理解できませんので、この右の歌も同じ程度の作と申すべきであらうかと思えます。

【注】○たつた山 十二番の「注」参照。○時雨ふりおけるならの葉の……といへる歌 「神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮の古ごとぞこれ」(『古今集』九九七、文屋有季)。「古今集」の詞書に「貞観御時、万葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければ、よみてたてまつりける」とある。○ならの御ときたつた山の紅葉御覧じける事 この記述と直接結びつく古い文献は見当たらないが、関係のありそうな記事が『古今集』仮名序に見られる。それによれば、和歌の伝来について「ならの御時よりぞ広まりにける」と言い、その少し後に「秋の夕べ、竜田河に流るる紅葉をば、みかどの御目に錦と見給ひ」と言っている。また、その後添えられた古注には「ならのみかどの御歌」として、「竜田河紅葉乱れて流るり渡らば錦中やたえなむ」(『古今集』二八三)が引かれている。この歌は『古今集』の本文では「よみ人しらず」であるが、左注には「この歌は、ある人、ならのみかどの御歌なりとなむ申す」とある。この「ならのみかど」は、平城天皇とする見方がある。○まはしてよめる 遠回しに詠んだ。題詠の場合に題の言葉を直接詠み入れることをせず、おのずと伝わるようにする詠み様で、『俊頼髓脳』や長明『無名抄』に説明が見える。十二番の「考察」参照。○たけある 高い格調が感じられる。一般にのびやかな表現のうちに精神的に張りつめた高いものが感じられる歌の特徴として言われる評語だが、ここでは「たけあるやうにて」と言い、表現が一見そのように見えるとの心を示したものであろう。

【考察】左の歌は、俊成の判詞に言うとおおり、理解しにくいところが

あるとも見えるが、俊成も言及しているように『古今集』の歌によって詠まれたところが認められるので、その面から作意を確かめておきたい。

左歌に「時雨ふりにし昔より」と言うのは、次の『古今集』の歌によつたと推測される。

神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮の古ごとぞこれ(九九七、文屋有季)

そして、この歌に「ならの葉の名におふ宮」が詠まれている点と、左歌に「竜田」の紅葉が詠まれていると見られる点から、『古今集』仮名序の古注に「ならのみかどの御歌」とする、「竜田」の紅葉を詠んだ次の『古今集』の歌も、(山と河の違いはあるが)併せて意識されていたかと思う。

竜田河紅葉乱れて流るり渡らば錦中やたえなむ(二八三、左注「この歌は、ある人、ならのみかどの御歌なりとなむ申す」)

左歌は、以上の『古今集』の歌二首に材料をとって構成されているように思われる。そう見ると一首の大意は、時雨が降ったと歌われる奈良の宮の昔から、竜田山は木々のこずゑが秋を忘れずに(紅葉して)いた、という風に解されることになる。この場合、題の紅葉は歌の言葉に出さず、「まはして詠む」詠み様を用いたと見られる。

右の歌は、紅葉が「面影にとまる」のではもの足りない、実際に「梢に散らぬ紅葉」であってほしいと詠む。端的な詠み様であるが、後の兼好が「すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは」と批評した対象にふさわしいような作であらう。

俊成の判詞は、左歌については、まず「何ともえこころえ侍らね」と言い、一首の表現が理解し難いと批判する。また下句に「こずゑぞ秋を忘れざりける」と詠んだのも、「こずゑ」に限定した点を疑問視する。さらに「紅葉をまはしてよめる」点を指摘するが、これも前の十二番左歌の場合と同様に、歌合の歌として不適当と見たのであろう。

一方、右歌については、歌い様は「をかしく」見えるが、一首の心

は「おろかなる事」と批判し、持と判定している。

十四番 左

皇太后宮大夫入道

27 しくれゆく空だにあるを紅葉ばの秋はくれぬと色に見すらん

右

大式入道

28 秋ふかき岩かきまゆみもみちして錦をかこふみやまへのさと

左、ひとへに秋暮れぬる事をしみて、紅葉をしも賞せざるにや侍らむ。右、岩かきまゆみとおきて、にしきをかこふなどいへる、彼石季倫が家に五十里の錦障たりけむなど思ひやられて、姿をかしく見え侍る。但、上に岩垣とおきて、末にかこふといへる、同事にや侍らむ。かこふは詞の様には侍れども、かこふといふもかきなるべし。されば昔切韻を見侍りしに、**椀籬也、以柴壅也**とありしやうにおぼえ侍り。仍勝負不分明。最下愚老、已迷是非。兩方之明士、定決雌雄歟。

【通釈】

十四番 左

皇太后宮大夫入道

27 しくれてゆく空だけでも、(秋も終りと思われ) わびしいのに、なぜその上もみじ葉が、秋は暮れたと色に見せるのだろうか。

右

大式入道

28 秋も深く、岩垣のまゆみもみじして、錦の幕で囲ったかと思える、深山辺の里よ。

左の歌は、専ら秋の暮れたことを惜しむばかりで、題の紅葉を賞美しないきらいがあるでしょうか。右の歌は、「岩垣まゆみ」と言っておいて、「錦を囲ふ」などと詠んだのは、あの石季倫の家に五十里にわたって錦の幕を立てめぐらした様子なども思いやられて、詠み様が面白く思われます。ただ上の句に「岩垣」の語を置いて、下の句に「かこふ」と言ったのは、同じ事を繰り返した(歌病に当たる)ものでしょうか。「かこふ」は用言のようですけれど、「かこふ」と言うのも垣を作ることでしょう。だから、昔

『切韻』を見ましたところ、「椀籬也、以柴壅也。」と記されていたように思います。それで、左右の歌は勝負が明らかでない。私のような最低の愚かな年寄りには、よしあしの判断に迷うばかりです。左右両方の具眼の方が、必ずや優劣を決めてくださるであろうかと存じます。

【注】○岩かきまゆみ 岩垣檀。岩が垣根のようにとり囲んでいる所の、岩の中のマユミ。マユミは、ニシキギ科の落葉低木または小高木。なお、「岩垣紅葉」の語は『古今集』(二八二)以下に用例がある。○石季倫が家に五十里の錦障たりけむ 石季倫は、名は崇、字が季倫。晉代の人。ぜいたくな暮らしを好んだという。その家に「錦歩障」(道を行く時目隠しとして両側に張る錦のとばり)を五十里にわたって作ったことが、『晉書』(石崇伝)に見える。○同事 ここでは、一首の歌の中で同じ事が重なることで、避けるべき欠点とされた。公任の『新撰髓脳』に、「ことあまたある中に、むねとさるべき事は、二所に同じ事のあるなり」と記される。歌病の一つに数えられる「同心の病」に相当する。○かこふは詞の様には侍れども この「詞」は、このままの形で、前後の文脈から見ると、用言の類を意味するかと思われる。ただ、そういう意味の「詞」の用例は、今のところ見いだせないが、後の用例では、『連理秘抄』に、「一、韻字 物の名と詞の字とこれをきらふべからず」とあり、この用例は用言の類を指すと見られる。谷山茂氏は、あるいは「こと詞」の「こと」(異)の誤脱かとされる。○切韻 古代中国の、韻によって分類した字書。隋代、六〇一年の成立。○椀籬也、以柴壅也 「椀」は、柴を立ててふさぐ意の字。俊成は「かこひ」に当たると見たか。すると「椀ヒハ籬ナリ、柴ヲ以テ壅グナリ」として引用したことになる。

【考察】左の歌は、しくれる空模様だけでも冬の近いことを思わせるのに、どうしてその上、もみじ葉が秋は暮れたと色に見せるのかと詠む。紅葉に寄せて秋の過ぎてゆくのを嘆く心であろう。

右の歌は、山里に秋が深まり、「岩垣まゆみ」が紅葉して、「錦をか

こふ」と見える様子を詠む。紅葉を錦に例えるのは常識的なことに属するが、この場合「岩垣」まゆみの紅葉を挙げて錦を「かこふ」と詠んだ点に、作者なりの工夫があるのである。

俊成の判詞は、左歌については、秋の暮れるのを惜しむ心を主として、題の紅葉を賞美するところが無いのを問題点として挙げる。この左歌は俊成自身の作だが、客観的な批判として妥当な見解であろう。

右歌については、石季倫のことなどを引用して「姿をかしく」と一応ほめる一方、「岩垣」と「かこふ」が「注」で触れたような「同事」に当たると問題視している。ただ、ここは、そういう言い方をしないと作者の工夫した趣向が生かされないと見られるので、一概に「同事」として否定するのは、いかがであろうか。勝負については、「不分明」としている。

【備考】十四番左歌は『新勅撰集』（三四四）に収められている。

十五番 雪 左

皇太后宮大夫入道

29 たづぬべき友こそなけれやまかげや雪と月とをひとり見れども

右

道因法師

30 朝戸あけてほかの雪をもながめやらん心のゆくはあとしつかねば

左歌、心は山居の雪を見て、彼王子猷が山陰の雪夜、戴安道をおもへる事をいへるにやとは見え侍れど、歌のおもてに雪の事すくなく侍らむ。右歌は雪のうたと覚えて、すがたもをかしく侍る。ほかの雪をもといへるや、すこし荒涼に聞え侍らんとぞ覚え侍る。勝負之条、これもさきの番におなじ。よりて不_レ加_レ判_レ耳。

【通釈】

十五番 雪 左

皇太后宮大夫入道

29 訪ねようと思う友は、わたしにはない、——山陰で、雪と月とをひとり眺めているのだが。

右

道因法師

30 朝戸を開けて、（わが家の庭に限らず、）外の雪も眺めやることにし

治承三年十月『右大臣家歌合』注釈

よう、——心の行く分には、（雪に）足跡はつかないから。

左の歌は、その心は、山の住まいで雪を見て、あの王子猷が山陰の雪の夜、戴安道を思ったことを詠んだのだろうかとは見られますけれど、歌の言葉の上に題の雪のことが十分に出ていないでしょう。その点、右の歌はいかにも雪の歌と思われて、また姿も面白い作です。（ただ）「ほかの雪をも」と詠んでいるのは、少々用意なものと受け取られるでしょうと思われます。勝負については、これも前の十四番と同様の場合です。そのため、判定を致しません。

【注】○朝戸あけて「朝戸」は、朝起きて明ける戸。「朝戸あけて」という続け方は、「朝戸明けてもの思ふ時に……」（『万葉集』一五八三）以下、用例が少なくない。○王子猷が山陰の雪夜、戴安道をおもへる事 王子猷は、名は徽之、字が子猷、晋代の文人。戴安道は、その友で、名は達、字が安道、晋代の文人。王子猷が山陰の住居で、雪後の月夜に、ひとり酒をくみなどするうちに、戴安道に会いたくなり、早速小舟に乗って戴安道の住居の門前まで行ったが、会わずに帰ったことに関する故事。「嘗居_ニ山陰_ニ、夜雪初_メ霽_ル。月色晴朗、四望浩然。独酌_ニ酒_ヲ、詠_ニ左思招隱詩_ヲ、忽憶_ニ戴逵_ヲ。逵時在_レ剡。便夜乘_ニ小舟_ヲ、詣_レ之_ニ。経_レ宿方_ニ至_リ、造_レ門_ヲ不_レ前_ニ而_レ反_ル。人問_ニ其故_ヲ。徽之曰_ク、本乘_レ興_ニ而_レ来_リ、興尽_ニ而_レ反_ル。何必_ニ見_ニ安道_ヲ邪_ト。」（『晋書』王徽子伝）

【考察】左の歌は、作者の俊成が判詞の中に記すとおり、王子猷が雪後の月夜に友の戴安道に会いたくなって出掛けたが、会わずに帰ったという故事を踏まえて詠んだ作である。それで、王子猷のように自分も山陰で雪と月をひとり眺める身だけれど、自分は訪ねようと思う友はないと詠んでいる。

右の歌は、朝戸を開けて、わが家の庭の外の雪も眺めやることにしよう、自分の心が行く分には雪に足跡もつかないから、と詠んでいる。新しい雪を踏んで足跡をつけることをはばかるのは伝統的な発想で、右歌もそれを基本にして工夫したと思われるが、やや理屈が目立つか

もしれない。

俊成の判詞は、自作の左歌については、子猷尋戴の故事を用いた作であることを明かす一方、題の雪に触れるところが少ないのを弱点として挙げています。

右歌については、雪の題にふさわしい作と認め、また、「姿もをかし」と評価するが、「ほかの雪をも」という表現は少々不用意に思われると批判する。

勝負に関しては、前の十四番の場合と同様、判者が作者でもある場合として、判定を避けている。

【備考】十五番左歌は『続古今集』(六六六)に収められている。

十六番

左勝

俊恵法師

31 打ちらはらふころもでさえぬひさかたのしらつきやまの雪の明ぼの

右

顕昭法師

32 浪かくるとしまが崎のはまひさぎしづえは雪もつもらざりけり

左歌、旅宿の雪などぞおぼえ侍れど、雪の曙といへる文字づかひ、をかしく侍るめり。しらつき山やしひて庶幾せられず侍らん。万葉集などの歌、殊に優なる事を歌合にはとりいづべき事とこそ、ふるくも申して侍るめり。又此山ひさかたにはいか侍らんや。此しらつきは若、槻の木にてもや侍らん。すこしおぼつかなく見え侍れども、いまはおほかたものおぼえず侍るなり。いかにひがごとども申したりと人の見候はんずらむ。右歌、としまが崎のはまひさぎ、これも歌のふるまひはをかしく侍るを、浪かくるしづえに雪のふらぬことわり、見所なくや侍らん。末につもらんをば、をばなともうたがひ、浜にしけるを月と見むや、雪の歌のほいに侍るべからんとぞおぼえ侍る。雪の曙はなほをかしくもや見え侍らむとて、以左為勝。

【通釈】

十六番

左勝

俊恵法師

31 雪を払う袖も、凍りきった、——白月山の雪のあけぼのは。

右

顕昭法師

32 波の打ち寄せる、としまが崎の浜ひさぎの、下枝は(波が打ち寄せ)雪も積もらないのだった。

左の歌は、旅宿の雪などを詠んだ歌のように思われますけれど、「雪のあけぼの」と詠んだ言葉遣いが、面白いようです。「白月山」は、あまり望ましい地名ではないように思います。『万葉集』などの歌については、特に優美なことを選んで歌合の歌には採り上げるべきだと、古人も言っているようです。また、この白月山は、「ひさかたの」という枕詞に続けるのは、いかなるものでしょうか。あるいはこの「しらつき」は、槻の木のことでしょうか。少々疑問に思われますが、私はもう(年老いて)全体に物事が考えられない有様です。間違ったことを言ったものだ、どんなに人は(さげすんで)見ることでしょう。右の歌の、「としまが崎の浜ひさぎ」、これも歌の詠み様は面白いのですが、波の打ち寄せる下枝に雪が積もらぬという理屈は、見所がないかと思えます。雪が枝の端に積もるのなら、それを尾花かと思えるとか、雪が浜一帯に降りついたのなら、それを月光と見るとかいう風に詠むのが、雪の歌の本来の在り方でしようと思われるのです。それで、左の雪のあけぼのの歌の方が、やはり面白く見られるでしょうかと考えると、左を勝とします。

【注】〇ころもで 衣手。袖。〇しらつきやま 白月山。『五代集歌枕』『八雲御抄』等は近江の歌枕とするが、所在不明。『万葉集』に「木綿包み白月山のさな葛のちも必ずあはむとぞ思ふ」(三〇八七)の一首がある。〇としまが崎 『五代集歌枕』『八雲御抄』に淡路の歌枕とする。ただし『万葉集』の歌に詠まれる「敏馬」(みぬめ)を「としま」としたとも見られ、その場合は今の神戸市東部の海岸で、撰津の歌枕になる。〇はまひさぎ 浜槻(久木)。浜に生えるヒサギ。ヒサギは『万葉集』以来詠まれているが、キササゲ(ノウゼンカズラ科の落葉

高木)のこととも、アカメガシワ(トウダイグサ科の落葉高木)のこととも言われる。○しづえ 下枝。○ほい 本意。本来あるべき心。なお「考察」で触れる。

【考察】左の歌は、白月山の雪のあけぼのに、雪を払う袖もさえる様子を、簡潔に詠んでいる。ただし詠み様は一本調子でなく、第三句に枕詞を置いて一種の間を作っている。いわゆる「半臂の句」で、その表現効果については、長明の『無名抄』に俊恵の説として紹介されているが、左歌は俊恵の作である点で注目される。

右の歌は、「としまが崎の浜ひさぎ」が、打ち寄せる波で下枝は雪も積もらないと詠む。「しづ枝は雪も積もらざりけり」に重点を置く一首と見えるが、俊成の判詞では、雪の題にこのように詠むことを疑問視している。

俊成の判詞は、左歌については、「雪のあけぼの」と詠んだ言葉遣いを「をかしく」と評価している。これは「雪のあけぼの」と詠んだ例が、当時はあまり見受けられなかったことにもよるであろう。ただし前例がなかったわけではなく、『顕輔集』に次の歌が見える。

かをらずはたれか知らまし梅の花白月山の雪のあけぼの(九三)
この歌は「白月山の雪のあけぼの」という下句が左歌と共通しており、左歌に影響した可能性が考えられる。

「白月山」に関しては、俊成は判詞に「庶幾せられず」と言っている。これは歌枕として詠まれた前例が少ないのが主な理由であろうか。『万葉集』(三〇七三)に用例があるが、『万葉集』の歌の場合は「殊に優なる事」に限って歌合の歌には採り上げるべきだと、俊成は言っている。また歌枕「ひさかたの」を「白月山」に冠して用いたことも疑問視している。ただこれは、「白月山」が「月」の字を含む点から、許容する見方もあるであろう。

一方、右歌についての俊成の判詞は、歌の詠み様は「をかしく」思われるが、「しづ枝は雪もつもらざりけり」と詠んだ点を「見所なく」と批判する。そして、雪の題の歌なら、雪の状況によって尾花に見立

てるとか、月光と見なすとか工夫して詠むのが、雪の歌の「本意」であろうと言っている。この歌の「本意」ということは、古く天徳四年『内裏歌合』で、歎冬を題とする八番右歌、

ひとへづつやへ山吹はひらけなむほどへてにほふ花とたのまむ
(兼盛)

に対する実頼の判詞に、

八重山吹の一重づつひらけむは、一重なる山吹にてこそはあらめ。心はあるに似たれども、八重咲かずば本意なくやあらむ。

と記されたのを初め、題詠による歌合では特に重視されてきたところである。その観点によると、雪の題の歌に「しづ枝は雪もつもらざりけり」と詠むのは、殺風景で「見所なく」思われることになるであろう。対する左の「雪のあけぼの」の歌が勝とされる。

十七番

左勝 寂蓮
33 ふりそむるけさだに人のまたれつるみやまの里の雪のゆふぐれ
大式入道

34 旅人ははれまなしとやおもふらんたかきのやまの雪のあけぼの
みやまのさとの雪は、今朝だに人のなどいへる心、よろしく侍るにや。たかきのやまの雪は、歌のたけありて、優に侍るべし。此たかきの山も、芳野の山にこそ侍れ。旅人などのつねにすぐる事はいとなくや侍らむと覚え侍るうへに、雪の夕ぐれ、すこしさびておもひやられ侍れば、又左のかたへつきや侍らむ。

【通釈】

十七番 左勝 寂蓮
33 雪の降り始めた今朝でさえ、人の訪れが心待ちにされた、この山深い里の雪の夕暮れ(の寂しさ)よ。

右 大式入道
34 旅人は、晴れ間がないと思うことであろうか、——高城の山の雪のあけぼのに。

(左の)「み山の里の雪」の歌は、「今朝だに人の(待たれつる)」などと詠んだ心が、結構であろうかと思えます。(右の)「高城の山の雪」の歌は、歌の格調が高くて、優美な作でしょう。(ただし)この高城の山も吉野の山に属します。旅人などが常に通るところとはまずなかるうかと思われまじ、(左の)雪の夕暮れは、少しさびた様子に思いやられますので、また左の方に味方し(て勝とし)ようかと思えます。

【注】○たかきのやま 高城たかきの山。正確な位置は不明だが、吉野山地の山で、『万葉集』に「み吉野の高城の山に白雲は行きはばかりてたなびけり見ゆ」(三五三)と詠まれる。○たけあり 十三番の「注」参照。○さびて 俊成の評語「さび」の用例は、すべて動詞の連用形として用いられている。その内容は、岡崎義恵氏によれば、「歌詞がやや古風で落着きがあり、静かな深い感じを与へるやうな場合に言つてゐるやうである」(『美の伝統』)とされる。なお「考察」でも触れる。

【考察】左の歌は、雪の降り始めた今朝でさえ人の訪れが待たれたと上の句に言うことで、山里の雪の夕暮れに人の訪れの期待できない寂しさを詠む下の句の心を際立たせた作であろう。

右の歌は、旅人は常に雪が降ると思うだろうか、高城の山の雪のあけぼのに、と淡泊に詠んでいる。末句「雪のあけぼの」は、「雪のしづくを」の形で、大式入道重家の子の経家の家集(二三八)に見える。このことについては、谷山茂氏が『歌合集』補注に詳細な推測をされているが、ここでは省略させていただく。

この右歌に対する俊成の判詞は、「たけありて優」と評する一方、高城の山は旅人などの常に通る所でないことを指摘している。そして左歌について、「降りそむる今朝だに人の待たれつる」と詠んだ上の句の心を「よろしく」と評価し、また「雪のゆふぐれ」と詠んだ情景を「すこしさびて」思いやられると言ひ、それを理由に左の勝と判定している。

「さび」という評語は、俊成は(嘉応二年『住吉社歌合』から建久末年頃『慈鎮和尚自歌合』までの)歌合の判詞に、十三の用例を残している。「さびて」「さびたり」などの形で用いており、歌の「姿」に關して言う場合が全用例のほぼ半数を占めている。俊成が「さび」と評した歌の価値をどの程度認めていたかという点は、歌合の勝負の判定状況が参考になるであろう。これは「左右共に姿さび」と評した用例を除き、十二例について見ると、勝五例、持四例、負三例である。ただしその勝五例の中には「さび」以外の特長も挙げたものがあるが、「さび」が少なくとも勝とされる根拠の一つになるようだ。一方負三例の内二例までは、「さび」の特長と異なる面で欠点を認めて負としたものである。それで俊成は「さび」の特長をかなり高く評価していたと言えるように思う。

【備考】十七番左歌は『新古今集』(六六三)に収められている。

十八番 祝 左持

35 君が代の末をはるかにみかさ山さしながらこそ神にまかすれ

右 大式入道 別当局

36 かずしらぬためしは何と人とはば君が御代とぞいふべかりける

左歌、いはひの心ふかく侍りぬべけれど、さしながらといふことば、数あるものをおきてむれたるといへるは、さながらといふにはかなふべきにや侍らん。右歌、すがたもをかし、祝の心も侍りぬれば、持と申侍るべし。

【通釈】

十八番 祝 左持

別当局

35 君のみ代の行く末を、はるかに遠いを見て、そのまま、三笠山の神のみ心にお任せ致します。

右 大式入道

36 数えきれない例には、何がふさわしいかと、人が尋ねたら、君のみ代(の年の数)と答えるのがよいと思います

左の歌は、祝いの心が深くこめられた作に違いないが、「さしな
がら」という言葉は、数の多いものを示した上で（それが）沢山
集まっているといった場合こそ、「さながら」と言うのにふさわ
しいだろうかと思うのです。右の歌は、姿も面白く、祝いの心も
含んだ作ですから、持と申しておきましょう。

【注】○君が代 「君」は、一般的に言えば尊敬すべき人を指すが、特
に高貴な身分の人、さらにそれを限定して天皇を指す場合が少なく
ない。「代」も、寿命を言う外に、栄えている時や（天皇の）治世を指
す場合がある。○みかさ山 九番の「注」参照。○さしなから 「さ
ながら」と同様、そのままの意。「さし」は「みかさ山」の「かさ」
の縁語。○かずしらぬ 数が多くて数えきれない。

【考察】左の歌は「君が代」の、右の歌も「君が御代」の長久をこ
ほぐ心の作と思われるが、「君が代」や「君が御代」などの語は、「注」
で触れたようにやや幅広く用いられるので、その指すところは歌に即
してできるだけ具体的に考えてみたい。

左の歌は、「三笠山」（御蓋山）を詠み入れて、「君が代」の長久
を「神」に任せると詠んでいるので、三笠山のふもとの春日大社を意
識した作であろう。この社は藤原氏の氏神を祭るから、この場合の
「君が代」は、藤原氏関係の地位の高い人物について、その寿命や栄
える代を指す可能性が高い。するとその人物には、この歌合を主催し
た右大臣藤原兼実あたりを考えてよいかもしれない。

右の歌では、「君が御代」と言っており、それが「数しらぬ」例に
ふさわしいと詠んでいるので、例えば『拾遺集』に見える歌、

蒲生野の玉の緒山に住むつるの千とせは君がみ代の数なり（二六
五、仁和の御時、大嘗会の歌）

の場合などと同様、天皇の寿命もしくは治世を「君が御代」と言っ
たと見てよからうか。

俊成の判詞は、左の歌については、題に応じて「祝ひの心深く」詠
まれている点を評価するが、「さしなから」という言葉が十分に生か

されていないことも指摘している。
右の歌については、「姿もをかしく、祝の心も」見られると評し、
持としている。

十九番 左 季経朝臣

37 君が代をいかにかぞへむ世中に数にたるべきものしなれば
右勝 源三位頼政

38 すみよしの神もしるらめよる浪の数かぎりなき君が御代をば
数にたるべき物しなればといへる、まことに峰の松、浜の真砂
をつくすとも、数ある物はしることもありぬべければ、祝のこ
ろかぎりなく聞ゆ。但、いかがかぞへむとおきて、数にたるべき
といへる、同じことにこそ待るめれ。住の江の波にかけて君が代
の数によせたる心は、優なるべし。おなじ事なきによりて、以
右為勝。

【通釈】 十九番 左 季経朝臣

37 君のみ代の年の数を、どうして数え尽くすことができようか、
世の中に、その数に及ぶものなど、あり得ないから。

右勝 源三位頼政
38 住吉の神も、ご存じであろう、——岸に寄せる波の数が限りないよ
うに、限りなく続く君のみ代の年の数のことを。

（左の歌は、）「数にたるべき物しなれば」と詠んでいるが、こ
れはまことに峰の松や浜の砂の数を全部数えるとしても、数のあ
る物は数えて知ることもありうるに違いないから、み代の長さを
祝う心が限りないものと思われる。ただ、「いかがかぞへむ」と言っ
て、さらに「数にたるべき（ものしなれば）」と詠んだのは、
同じことを繰り返して言った（歌病に当たる）ものようです。

（それに対して右の歌で、）住の江の波に関連させて君のみ代の年
の数に言い及んだ心は、優美と見られるであろう。（左歌のよう

な) 同じ事の繰り返しもないところから、右の歌を勝とする。

【注】○君が代 十八番の「注」参照。○すみよしの神 「住吉」は、摂津の国の歌枕。今の大阪市住吉区あたり。海辺の地で、神功皇后の船を守護したとされる筒男三神を祭る住吉神社(現在の住吉大社)は、特に航海安全の神として古来信仰された。○すみよしの江。前記の住吉と同じ所。『万葉集』では「すみよしの」と言われたのが、その表記の一つが「住吉」であったことから、平安時代には「すみよし」とも言われた。『八雲御抄』巻五では「江」の項に「すみよしの江」を挙げ、「里」「岸」「浜」「浦」「社」の項に「すみよし」を挙げる。○同じこと 「同心の病」に相当する歌病として言う。十四番の「同事」の「注」参照。

【考察】左右の歌は、「君が代」または「君が御代」の年の数が限りなく多いことを祝う心を詠み、その点で、前の十八番右歌などと共通するところが見られる。

俊成の判詞は、左歌については、「祝の心かぎりなく聞ゆ」と評価する一方、「いかが数へむ」と「数にたるべき(ものしなれば)」とは、「同じこと」を繰り返したものと指摘する。これは十四番右歌に対する判詞で「同事」として批判したのと同様、歌病に言う「同心の病」に当たる点を批判したものである。

そして右歌については、住の江の波に寄せて「君が代」の限りないことを詠んだ心が「優」であると評し、左歌のような「同じ事」を繰り返す難点もないと言って、勝とする。

二十番 恋 左持

皇太后宮大夫入道

39 あふ事は身をかへてとも待つべきによよをへだてむほどぞかなしき

右

丹後

40 おもひねの夢になぐさむ恋なればあはねど暮の空ぞまたるる

左歌、ものふかきこちして、をかきさまにも見え侍るべし。

右歌、あはねど暮の空ぞまたるといへる、けちかきさまして恋

の歌とおぼえてこそ。但、勝負不能定申敷。

【通釈】

二十番 恋 左持

皇太后宮大夫入道

39 (恋しい人に)逢えるのは、生まれ変わった後と違って、待つべきだろうが、(待つ間の)世を隔てる時の長さが、悲しいのです。

右

丹後

40 (恋しい)人を思っただけで、夜の夢で慰められる恋だから、実際には逢えないけれど、夕暮れの空が待たれるのです。

左の歌は、何となく深いものが感じられて、面白い風にも見えることでしょう。右の歌は、「逢はねど暮の空ぞ待たる」と詠んでいるのが、身近な様子に見えて、恋の歌にふさわしいと思われるのです。ただし勝負については、(判者である私の歌が番えられているので)判定できないことになるとおもいます。

【注】○身をかへて 別人に生まれ変わって。○よよをへだてむほど 現世と来世を隔てる長い時間。「よよ」の「よ」は、仏教で言う三世(前世・現世・来世)の「世」を意味する。ただ一方で「夜」の心で「あふ」に縁をもたせてもいるのであろう。○おもひね 思ひ寝。(恋しい人を)思いながら寝ること。夢の中で恋人に逢えるとされた。

【考察】左の歌は、恋しい人に逢うことは現世ではかなわず、来世を待つ外はないと思うにつけ、その世を隔てる長い時を待つのが悲しい旨を詠む。恋の歌に仏教の三世の思想をとり入れて詠んだのが、一つの特徴であろう。

右の歌は、夜の夢に逢って慰められる恋だから、現実に逢いはしないが、夕暮れの空が待たれると詠む。「思ひ寝」のはかなげな恋を印象つける一首かと思う。

俊成の判詞は、左歌については、「もの深き」心地がして、「をかきさま」にも見えるであろうと言う。左歌は俊成自身の作であるが、恋する人に逢える折を来世のこととし、それまでの長さを嘆いた作意を、客観的に見て目立った特色として挙げたのであろう。

それに対して右歌は、「け近きさま」に感じられる点があって、恋の歌にふさわしいと評している。ただ左歌が俊成の自作であるので勝負の判定はできないと言う。これは前の七番、十四番、十五番などの場合と同様である。

【備考】二十番の左歌と右歌は、『千載集』（八九七・八九八）に並べて収められている。

二十一番 左勝

季経朝臣

41 思ひ出づるそのなくさめも有りなまし逢見て後のつらさなりせば

右

顕昭法師

42 よそにみる人はかくしもいとほぬをうき身は恋にあらはれにけり

左の歌、恋のころもさる事と聞えて、すがたも優に待るめり。

右、姿はをかき様に待るを、うき身は恋にといへる、少おそく心おそくしれにけるにやときこゆらん。以^レ左為^レ勝。

【通釈】

二十一番 左勝

季経朝臣

41 思ひ出すという、慰めもあるだろう、——恋しい人が逢った後につれないのなら。（しかし、あの人は逢ってくれない。）

右

顕昭法師

42 かかわりのない人は、恋しい人のように私を嫌わないから、私に人嫌われるつらい身とは、恋をして思い知らされたのだ。

左の歌は、恋をする心も、なるほど思われて、歌の姿も優美なように思います。右の歌は、姿は面白い様子ですけれど、「憂き身は恋に（あらはれにけり）」と詠んでいるのは、（憂き身であることに）気付くのが少し遅過ぎたかと思われるだろう。左の歌を勝とする。

【注】○逢見て「逢ひ見る」は、男女が契りを結ぶ意。○よそにみる人 関心もなく見る人。第三者。○さる事 もっともなこと。

【考察】左の歌は、恋しい人が逢った後につれないのならば、逢った

思い出が慰めにもなるだろうと言う。そんな言い方で、恋しい人が逢ってくれないつらさを嘆いた作であろう。

右の歌は、恋しい人が自分を嫌うようには一般の人は自分を嫌わないので、自分が人に嫌われる「憂き身」であることは、恋をして思い知ったと詠む。

俊成の判詞は、左歌については、恋の心も納得され、歌の姿も「優」と評価している。

右歌については、歌の姿は「をかき様」と評するが、歌の心を問題視しているようだ。恋をして自分が「憂き身」であることを知ったと詠むが、気付くのが遅過ぎるというのである。それで、対する左歌を勝としている。

【備考】二十一番左歌は『千載集』（七〇一）に収められている。

二十二番 左勝

俊恵法師

43 わが恋はいまはかきりと夕まぐれ萩ふく風のおとづれてゆく

右

道因法師

44 くれなるにみだの色のなりゆくをいくしほまでと君に問はばや
左、秋の夕まぐれの野風などいはん題の歌にやとぞ見ゆれど、おもひ入りたるさまには侍るべし。右、紅になみだの色のなるといふはつねの事にてこそ侍れど、いくしほまでと君にとはばやといへる末の句、よろしく侍るめり。但左も猶こころ有りて見侍れば、為^レ勝。

【通釈】

二十二番 左勝

俊恵法師

43 わたしの恋は、もう終わったと言うように、（人の訪れぬ）夕暮れ、萩を吹く風が音を立てて来て、吹き過ぎてゆく。

右

道因法師

44（あなたのつれなきに）紅に涙の色が染まってゆくが、一体幾度まで染めさせるのかと、あなたに問いたいと思う。

左の歌は、秋の夕暮の野の風などというような題にふさわしい歌かと思われるが、深く思いこんだ様子で作でしょう。右の歌は、紅に涙の色がなると詠むのは通常のことですけれども、「幾人までと君に問はばや」と詠んだ下の句は、結構なように思います。ただし、左の歌もやはり思い入れて詠んでいると見ますところから、(左の)勝とします。

【注】○夕まぐれ ここでは「夕」に「言ふ」を掛ける。○萩 をぎ。イネ科の多年草。湿地に群生する。スキに似ているが葉や穂が大きい。○おとつれて 音を立てて。○くれなるになみだの色のなりゆく(つらさのあまり) 流す涙が血涙として紅の色に染まってゆく。○いくしほまで 幾人まで。幾度まで。「入」は、色を染める場合、染料の液に浸す度数を数えるのに用いる接尾語。

【考察】左の歌は、女の立場での作であろう。夕暮れに恋人の訪れはなく、恋はもう終わったと言うかのように、萩の葉を吹く風のみが音を立てて来て、吹き過ぎてゆくと詠む。萩の葉を吹く風の音は、秋の訪れやわびしさを示す歌材とされ、古い例では、

いとどしくもの思ふやどの萩の葉に秋とつげつる風のわびしき
〔後撰集〕二二〇、よみ人しらず)

などと詠まれているが、それがこの左歌などでも生かされているようである。

右の歌は、恋する相手のつれなさを嘆く心で、紅に涙の色が染まってゆくが、「幾人まで」染めさせるのかと相手に問いたいと詠む。この紅の色の涙のことは、古く『古今集』の歌以来詠まれるところで、『詞花集』には、

くれなるになみだの色もなりにけり変はるは人の心のみかは(二二〇、源雅光)

という、上の句が右歌と類似した作も見え、右歌は多分その影響を受けているであろう。ただ右歌の下句で染色に例えて「いくしほまでと君に問はばや」と言ったのは、新しい詠み様をしたことになる。

俊成の判詞は、左歌については、「思ひ入りたるさま」と評し、右歌については、その下句を「よろしく」と評した上で、やはり左歌が「心有り」と見えるとして、勝とする。

【備考】二十二番の左歌と右歌は『新古今集』(一三〇八、一一二三)に収められている。

二十三番 左勝

45 ゆきかよふ心に人のなるればや逢見ぬさきに恋しかるらん
右 女房 経家朝臣

46 つらきをもうきをもしらぬ心には何をかひとて恋しかるらん
左歌、おもひつつへにけるとしをしるべにてといへる歌の心にかよひて、これはあひ見ぬさきに恋しかるらむといへるすがた、をかしくこそ待るめれ。右歌、うきをもしらぬなどいへる、歌めきて聞侍る。(群書類従)すゑの句やあまりさへこころもなからむ心ちして侍らん。仍以左為勝。

【通釈】

二十三番 左勝

45 かよって行く私の心に、あの人になじんでくれたので、まだ逢わな
い前から恋しく思われるのだろうか。
右 女房 経家朝臣

46 人のつれなさも身の憂さも思い知らぬ、そんな私の心に、一体何を
めどにして、人が恋しく思われるのだろうか。

左の歌は、「思ひつつ経にける年をしるべにて(なれぬる物は心なりけり)」と詠んだ歌の心に通じるところがあって、ここでは「逢ひ見ぬさきに恋しかるらむ」と詠んだ歌の姿が、実に面白いと思います。右の歌で、「憂きをもしらぬ(心には)」などと詠んでいるのは、歌らしい詠み様と思われれます。(けれども)下の句は、あまりに情の乏しい言い様に感じられるでしょう。そのため左の歌を勝とします。

【注】○つらき 恋の相手がつれない意に解しておくが、それによる我が身のつらきとも見られる。○何をかひとて 神宮文庫本、群書類従本等には「何をかはとて」、書陵部本『経家集』には「なにをなにとて」とあるが、意味が通じにくいように思う。○おもひつつへにけるとしをしるべにてといへる歌 一首全体の形は「通釈」に記した。『後撰集』(一〇二二)に収められた、よみ人しらずの歌。人を思い続けて過ごした年によって、その人に慣れ親しむことができたのは心だった(わが身は近づけなかった)という大意であろう。

【考察】左の歌は、恋しい人のもとへ心を通って行き、その心に相手がないでくれたので、我が身が通う前から恋しく思われるのだろうか、と詠んだのであろう。心と身とを二元的にとらえ、夢の中で心が身を離れて恋しい人のもとに通うという見方によっている。

右の歌は、部分的に似た言葉を用いた次のような恋の歌の先例がある。

つらきをもうきをもよそに見しかども我が身に近き世にこそあり
けれ(『後撰集』七四九、土佐)

つらきをも思ひもしらぬ身のほどに恋しさいかでわすれざるらん
(『金葉集』四三七、藤原長実)

こういう歌を参考に見ると、右の歌は、人のつれなさも我が身の憂さも思い知らぬ、そんな自分の心であるのに、一体何をめぐに恋しい気持ちがあるのだろうか、と自らの恋心を省みた作意であろうか。

俊成の判詞は、左歌については、特に下句を挙げて「姿、をかしく」と評価している。右歌については、上の句は「歌めきて」受けとられるが、下の句が「心もなからむ心地」がすると言いい、対する左歌の勝とする。

【備考】二十三番左歌は『千載集』(七四二)に初句「ゆきかへる」の形で収められている。

二十四番 旅 左

隆信朝臣

47 旅ねするむろのかり田のかり枕鳴もたつめりあけぬこのよは

右勝

源三位

48 宮古へはいまもことづけやるべきにうつつ山べに逢ふ事ぞなき

左、むろのかり田に鳴たつなどぞ、ちかき歌に侍りしかど、おき所かはりて侍りぬれば、姿をかしく侍るめり。末の句の明けぬこの夜はとおけるぞ、此比常に見るこちして、さまでもなき事の例の事とおぼえ侍る。右、宇津の山べにといへる、ことによそへんとなければ、彼うつのやまべのうつつにもといへる歌をおもへる心、宜しくこそおぼえ侍れ。左歌はふるまひたる様にて、耳とまる所あり。右はことなる詞なくて心旅の歌とおぼえたり。勝と申侍るべし。

【通釈】

二十四番 旅 左

隆信朝臣

47 旅の泊まりをする、早稲の刈り跡の田、その仮寝の枕に近く、鳴が羽ばたいて飛び立つようだ、――夜は明けたのだ。

右勝

源三位

48 都へは、すぐにも便りを、人に頼んで送ろうと思うが、宇津の山辺で、人に会うこともない。

左の歌で、「むろのかり田」に鳴がたつなどということは、近いころの歌に例がありました。言葉の置き所が変わっていますので、歌の姿は面白いようです。(しかし)末の句に「明けぬこの夜は」と詠んだのは、近ごろよく見掛ける文句という気がして、さほどでもない事柄をそんな風に言う、例の詠み様と思われまます。右の歌で、「宇津の山べに」と詠んだのは、これを特に関連させて言おうとしたわけではないが、あの「宇津の山べのうつつにも」と詠んだ歌を思った心が、結構に思われるのです。左の歌は特に趣向を凝らした様子だが、耳障りなところがある。右の歌は特別な言葉を用いず、その心が旅の歌にふさわしいと思われた。(右

の)勝と申すべきでしょう。

【注】○むろのかり田 この「むろ」については、『色葉和難集』(巻五「むろのおしね」の項)に、「顕昭曰」として、「むろとは早き稲をいふなり。むろのはやわせともいふ」と記す。「室の刈り田」は、室で促成栽培した早稲が植えてあったのを、刈り取った後の田を言うらしい。○かり枕 仮枕。仮寝と同じ。一時的な旅の宿りを言う。○鴨しぎ。中形の水鳥。和歌では羽音を立てる様子がよく詠まれる。○宮古 みやこ。都。○うつ山 宇津の山。駿河の国の歌枕。今の静岡市宇津ノ谷と岡部町との境にある宇津ノ谷峠。『伊勢物語』九段によって有名。○ふるまひたる様 工夫したところを特に意図的に表現した詠み様を、ここでは言ったのであろう。

【考察】左の歌は、旅寝の夜が明けた情景を詠んでいるが、先行歌の語句を取り入れて一首を構成したと見える。すなわち、「室の刈り田」に旅寝をして迎えた朝「鴨も立つめり」と詠んだのは、次の歌によったのであろう。

わがかどのおくての引板におどろきてむろの刈り田に鴨ぞ立つなる(『千載集』三二七、源兼昌)

また末句を「明けぬこの夜は」としたのは、次の歌の末句を用いたのであろう。

近江より朝たちくればうねの野にたつぞ鳴くなる明けぬこの夜は(『古今集』一〇七一、大歌所御歌、近江ぶり)

左歌は、これらの先行歌の語句を取り入れて、旅寝の夜明けの情景としてまとめたものと見られる。また歌の声調の面では、「かり田のかり枕」といった同音反復の技巧も用い、歌全体に作者がかなり工夫をこらした跡がうかがわれると思う。

右の歌は、旅立ってきた都へ便りをしたいが、宇津の山で人に会うこともない由を詠む。これは『伊勢物語』第九段(東下り)の、宇津の山で次の歌の詠まれる一節を取り入れたと見られる。

駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

右歌では旅の心に重点を置き、「あはぬ」人の指すところも変えているが、それなりに自然に、のびやかに詠んでいるようである。

俊成の判詞は、その最後に左右の歌の特徴を対照的に挙げた部分に、この場合の批評の眼目を要約して記していると思われる。そこでは左歌については、

ふるまひたる様にて、耳とまる所あり。

と言う。表現の上で工夫を見せた作と思われるが、耳障りなところがあると指摘したのであろう。大歌所の歌の末句「明けぬこの夜は」など、印象的な語句にせよ、そのままの形や位置で用いるのは、安易な手法として、俊成は不満をおぼえたのだろうと思う。

それに対して右歌については、

ことなる詞なくて心旅の歌とおぼえたり。

と言って勝とする。左歌のような目立った表現技巧を用いないが、旅の題にふさわしい心をよく表現していると評価したものと思われる。こういう評価の仕方は、俊成が歌に長年かかわってきた結果達した境地の一面を伝えているように思う。

二十五番

左

季経朝臣

49 朝夕に面影さらぬ都かなころやさきにたちかへるらむ

右勝

資忠

50 旅ねする庵を過ぐるむらしぐれ名残までこそ袖はぬれけれ

左右ともにことなる事なく、優には待るにとりて、右の名残まで袖はぬれけれといへる、いとよろしくきこゆ。右勝ち待るべし。

【通釈】

二十五番

左

季経朝臣

49 朝夕に、都の面影が目の前に浮かんで離れない、——心が我が身に先立って、都に帰っているのだろうか。

右勝

資忠

50 旅寝をする小屋を、降り過ぎて行くむら時雨は、後の気配までもの

悲しく、(涙でさらに) 袖が濡れるのだった。

左右の歌は、ともに特に目立つところがなく、優美な作なのですが、それにつけて言えば、右の歌で「名残までこそ袖はぬれれ」と詠んだのが、大層結構に思われる。右の勝でしょう。

【注】○面影 思いつかべられるイメージ。○さらぬ 離れない。○庵 いほり。飯の小屋 ○むらしぐれ 時々強く降って通り過ぎる時雨。○名残 なごり。過ぎた後に残る状態、気配。

【考察】左の歌は、旅立ってきた都を思う心の作だが、都の面影が眼前に浮かんで離れないのは、自分の心が身を離れ、身に先立って都に帰っているのかと詠んでいる。なお、一首は『季経集』(七一)には、上の句が「まだきより面影にたつ都かな」の形で収められる。

右の歌は、旅寝の飯の宿りを降り過ぎる時雨のもたらす、もの悲しさを詠む。この種の歌は少なくないが、時雨の後の「なごりまで」もの悲しく、涙でも袖が濡れたと詠んだのは、この歌の特色であろう。

俊成の判詞は、左右の歌が「ともにことなる事なく、優」であると評する。二首ともに表現上特に目立つ点はなく優美であると評価しているようである。そしてその上で、右歌が「なごりまでこそ袖はぬれれ」と詠んだのを、「いとよろしく」と言い、勝としている。

【備考】二十五番右歌は『千載集』(五三九)に収められている。

二十六番 左

俊恵法師

51 妹しるや葉山しげやまこえくらし木の葉かたしき明しつる夜を

右勝

顕昭法師

52 遠ざかるままに都の忍ばれてかさなるやまのうらめしきかな

左歌、いもしるやおける歌のふるまひいとをかしく侍るを、葉山しげやまとおきて、木の葉かたしくといへる、字かさなりてこそ侍るめれ。しからずはよく侍るべからむ。右歌、ままた都ぞといへる、彼さよ更くるままた汀や氷るらんといへる歌をこひねがへるにやあらむ。これは、遠ざかるままに都のといふ句、よろし

きにあらざるべし。但、かさなる山のといへる末の句も旅のころいうに聞ゆ。同事なれども、以_レ右為_レ勝。

【通釈】 二十六番 左

俊恵法師

51 彼女は知っているだろうか、——私が葉山しげと越えて日を暮らし、木の葉の床に独り寝して夜を明かしたことを。

右勝

顕昭法師

52 都から遠ざかるにつれて、(都が) 懐かしく、重なり隔てる山々が、恨めしくなる。

左の歌は、「いも知るや」の句を用いた一首の趣向が、大層面白く思われますが、「葉山しげ山」と言った上で「木の葉かたしく」と言ったのは、同じ文字が重なって使われているようです。そういう問題がないなら、よい作だろうと思います。右の歌で、「ままた都ぞ」と詠んでいるのは、あの「さ夜ふくるまに汀や氷るらん」と詠んだ歌を手本としたのであろうか。だがこの場合の「遠ざかるままた都の」という句は、あまり感心できないでしょう。ただし、「重なる山の(うらめしきかな)」と詠んでいる下の句は、旅の心が感じられて優美に思われる。左右の歌は同じような作だけれど、右の歌を勝としておく。

【注】○妹 いも。女性を親しんで言う語。○葉山しげやま 「葉山」は、本来は「端山」で、「奥山」に対して、人里に近い浅い山を言う。一方「繁山」は、草木の茂った山で、奥山に相当するので、これを並べて「は山しげ山」と言う場合、「は山」の「は」に葉を響かせて「葉山」とすることが行なわれた。この語を用いた歌では、「つくば山は山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」(『新古今集』一〇一三、源重之)が有名。古い用例は神楽歌の「つくば山は山しげ山しげきをぞ や たが子も通ふな下に通へわが夫は下に」。○木の葉かたしき 「片敷く」は、古代男女が共寝をする時に二人の衣を重ねて敷いたことから、寝る時自分の衣だけを敷く意で、独り寝をするこ

とを言った。それで、俊成の判詞の前半の左歌に対する批評の終りに、群書類従本では、「木の葉かたしきといへる、木の葉はいかが片敷くとは言ふべからむとぞ覚え侍る。」という批判の言葉が見える。しかし作者は、木の葉の上に独り寝をして、の意で言ったのであろう。○さよ更くるまに汀や氷るらん 『後拾遺集』(四一九)に見える快覚法師の歌の上の句。下の句は「遠ざかりゆく志賀の浦波」。

【考察】左の歌は、「妹知るや」と歌い起こし、山々を越え、夜は木の葉の上に独り寝をする旅のつらさを詠んでいる。似寄りの形と心をもつ先行歌としては、

恋しさを妹しるらめや旅寝して山のしづくに袖ぬらすとは(『金葉集』四八二、藤原顕季)

のような作も考えられるが、左歌は初句に「妹知るや」と置き、「葉山繁山」の語を織りこみ、旅の様子を昼夜にわたってとり上げるなど、全体に手際よく見どころをもつ歌に仕立てているようである。

それに比べると、右の歌はより素直と言うべき詠み様であろう。都から旅立って遠ざかるにつれて、都が恋しく、都との間を隔てて重なる山々が恨めしい由を詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については、「妹知るや」で始めた「歌のふるまひ」を「いとをかしく」と評価する一方、「葉」の文字が重ねて用いられている点を問題視している。

右歌については、「遠ざかるまに都の」と詠んだ点を、範としたと思われる「さ夜ふくるまに汀や」(『後拾遺集』四一九)に対比して、「よろしきにあらざるべし」と指摘する一方、下の句の「重なる山のうらめしきかな」を「旅の心優にきこゆ」と評価する。

そして俊成は結局、右歌を勝としている。その理由は明記していないが、多分二十四番判詞の最後に記したのと同様の基準を主としたのであろう。すなわち左歌については、

ふるまひたる様にて、耳とまる所あり。
右歌については、

ことなる詞なくて心旅の歌とおぼえたり。
と見たものであると思う。

二十七番

左勝

女房

53 日をへつつ都しのぶのうらさびて浪よりほかの音づれもなし

右

仲綱

54 宮城野のこのした露を打ちほらひ小萩かたしきあかしつるかな

左歌、すがた心をかしくこそ侍るめれ。浦さびてといへる、すこしいかにぞやきこゆらむ。右歌、ことなる事侍らず。左、浪よりほかのなどいへる、ことによるしく聞え侍れば、可_レ為_レ勝。

【通釈】

二十七番

左勝

女房

53 旅の日がたち都を懐かしむ、この信夫の浦は、荒れて寂しく、波の音がするばかりで訪れる人もない。

右

仲綱

54 宮城野の、木の下露を払い、小萩の床に独り寝をして、夜を明かしたのだった。

左の歌は、その姿心が、まことに面白いように思います。ただ、「浦さびて」と詠んだのは、少々いがかと思われるでしょう。右の歌は、別に目立ったことはありません。左の歌は、「浪よりほかの(音づれもなし)」などと詠んでいるのが、特に結構に思われますので、勝としましょう。

【注】○都しのぶのうら 都を「しのぶ」ことに地名「信夫」を掛けて言う。「信夫」は陸奥の国の歌枕。その場合、「信夫山」「信夫の里」などは今の福島市の辺りで見られるが、「信夫の浦」は所在不明で、想像して作られた地名かもしれない。○うらさびて 「浦さびて」(浦に人けがなく荒れる意)に、「心さびて」(心さびしく感じる意)を掛けて言う。○音づれ ここでは波が音を立てることと、人の訪れることとを兼ねて言う。○宮城野 陸奥の国の歌枕。今の仙台市の東部に

あった野。露や萩の名所とされた。

【考察】左の歌は、長い旅をしてきて都が恋しいが、ここ信夫の浦は寂しく、波の音ばかりして訪れる人もないと詠む。都を「しのぶ」とに「信夫」の浦を掛け、「浦さびて」に「心さびて」を掛けるなど、表現上の技巧を手際よく用いた一首であろう。

右の歌は、宮城野で「木の下露」を払い、「小萩」の床に独り寝の一夜を明かした旨を詠む。宮城野は『古今集』の

みさぶらひみ笠と申せ宮木野の木の下露は雨にまされり（一〇九一、東歌）

宮木野のもとあらの小萩露をおもみ風を待つこと君をこそ待て（六九四、よみ人しらず）

などの歌以来、露や萩の名所として知られるが、その点を旅寝のさまに結びつけて、平明に詠んでいる。表現の面では、左歌よりも単純な詠み様であろう。

俊成の判詞は、右歌については「ことなる事侍らず」と言うのみで、左歌を主として記している。左歌に関しては、「姿心をかしく」と評し、特に下句を「ことよろしく」と言って、勝としている。

【備考】二十七番左歌は『新古今集』（九七一）に収められている。

二十八番 述懐 左

皇太后宮大夫入道

55 かきつめておもふもかなしもしほ草しづみはてにし名こそ惜しけれ
右 資隆朝臣

56 はなれ駒ゆくも帰るもおどろかぬこころこそ猶うらやまれけれ

左歌、もしほ草かきつむなどこそ事ふりておぼえ侍れ。右の歌、はなれ駒、めづらしく侍るべし。歌体不相似懸隔之上、判者愚詠、依例不能勝負。

【通釈】

二十八番 述懐 左

皇太后宮大夫入道

55 藻塩草をかき集めるように、詠草をかき集めて、昔を思うと悲しい。

沈みはてた私の名のこと、口惜しく思われる。

右 資隆朝臣

56 放れ駒を用い、行くにも帰るにも動じない心、その心はやはり、うらやましく思われる。

左の歌で、「もしほ草」を「かきつむ」などと詠んだのは、言い古されたことに思われます。右の歌で「放れ駒」を詠んだのは、目新しいことでしょう。二首は歌の姿に似たところがなく、懸け離れた詠み様である上に、一首は判者である私の作なので、前例に従って勝負を決めることができません。

【注】○かきつめて かき集めて。ここでは「もしほ草」をかき集めての意で言う。○もしほ草 藻塩草。塩を採るための海藻だが、詠草（詠んだ歌）を掛けて言う。海藻の意では、後の「沈み」と縁語関係を作り、詠草の意では、前の「かきつめて」の「かき」を「書き」の意味として縁語関係を作る。○はなれ駒 綱・柵などの人の束縛から放れた馬。

【考察】左の歌は、「もしほ草」（詠草）を「かきつめて」（かき集めて）昔を思うと悲しい、沈みはてた私の名が口惜しい旨を詠む。「かきつめて」と「もしほ草」とを、この左歌と同じ第一句、第三句に置いた次のような歌が『源氏物語』（幻）に見え、その影響を考慮してよいかもしれない。

かきつめて見るもかひなしもしほ草おなじ雲るのけふりとをなれこの一首は、光源氏が紫上の死後、残された文がらをまとめて焼かせる折の歌として記されたものである。（なお、この源氏の歌では、「かきつめて」に、書き集めての意味は認められない。左歌の場合は「かきつめて」を「書きつめて」との掛詞と見ることができると思うが、源氏の歌と同様の詠み様とすれば、「書き」は主な意味を示さず、詠草の意の「もしほ草」と縁語になるように軽くにおわせたものと見ることになる。）

右の歌は、その作意が十分にとらえ難い一首のようである。この点

に関して、谷山茂氏は日本古典文学大系『歌合集』の頭注に、次のように言われている。

表現不足か、意味不分明。一頭の駒が自ら行き帰るにも驚かぬのか、行く駒も帰る駒も驚かぬのか、駒が人の往来などにも驚かぬのか。しかも、驚かぬのは、平静・無関心・無自覚等、いずれの意か。或は張湛白馬の故事でもふまえているか。

それにしても、あえて作意を探る手掛かりを探ると、「はなれ駒」の語を用いた『後拾遺集』の源兼俊母の歌（九八九）の場合と同様、『韓非子』に見える、管仲が遠征の帰途道に迷って老馬を放ち、それに随って道を得たという故事によって詠んだ可能性も考えられるのではないか。その『韓非子』の記事の要所を摘記すると、次のとおりである。

春往冬反。迷惑失道。管仲曰、老馬之智可用也。乃放老馬而随之。遂得道。

右歌はこの記事を取り入れ、管仲が放れ駒を用いて遠征の行き帰りの困難に動じなかった將軍ぶりを挙げ、我が身にとって「うらやまれけれ」と詠んだと見ては、いかがであろう。「通釈」は、この見方によって記してみた。

俊成の判詞は、自作の左歌については、「もしほ草」「かきつむ」など、詠み古された表現だと言い、対する右歌については、「放れ駒」を詠んだのは「めづらしく」と評している。ただ左右の歌は詠み様も異なるし、一方は自作だから前例により勝負は決められないとしている。

二十九番 左勝

57 いまはただいけらぬ物に身をなして生まれぬ後の世にもふるかな
右 資 忠

58 うきながら猶おどろかぬわが身かな夢路に迷ふ心ちのみし
左歌、心ふかく、すがたをかしく、いとよろしくこそ侍れ。右歌、

なほおどろかぬとおき、夢路にまよふなどいへる、心はをかしくは侍るを、かやうの夢の心つねにみなれたる様に申し侍らむ。左なほめづらしく見え侍る。為勝。

【通釈】

二十九番 左勝

師光

57 今はもう、（現世に）生きていないものと、我が身を考えて、まだ生まれぬ来世に当たる世に、暮らす気持ちなのだ。

右

資忠

58（世に生きるのを）つらいと思いつながら、なお目覚めない我が身なのだ、——夢の中に迷う心地を離れられずに。

左の歌は、思い入れが深く、姿が面白く、大層結構な作と思えます。右の歌で、「なほおどろかぬ」と言って、「夢路にまよふ」など

と続けているのは、着想は面白いとは思いますが、こういう夢になぞらえる着想は、よく見掛けた詠み様と申すものでしょう。

左の歌がやはり目新しい作と見られます。左を勝とします。

【注】○いけらぬ 生けらぬ。「ら」は助動詞「り」の未然形。生きていない。○生まれぬ後の世 まだ生まれていない後世。来世。仏教の考え方による言葉。○おどろかぬ 目覚めない。ここでは迷いの境地を脱しない状態を、仏教の立場から言う。○夢路に迷ふ 夢の中で行き迷う。悟り得ない状態を例えて言う。

【考察】左右ともに仏教思想に關係する述懐の歌だが、左の歌は、我が身を現世ではもはや生きていないものと考えて、来世に当たる世に暮らす思っている由を詠む。ちなみに作者の師光は源氏だが藤原頼長の猶子になり、そのためか官途不遇であったようで、そのことをこの述懐の歌の背景に考えてよいかもしれない。

右の歌は、憂き世と思いつながら「おどろかぬ」我が身だ、「夢路に迷ふ」心から離れられずにと詠む。悟ることができず、迷い続ける自分の有様を、夢から覚めない状態になぞらえて表現した作である。ただ、こういう詠み様は、同時代の次のような歌にも見られる。

おどろかぬわが心こそうかりければかなき世をば夢と見ながら
『千載集』一二三五、登蓮)

世の中を夢と見る見るはかなくも猶おどろかぬわが心かな(『山
家集』七五八)

俊成の判詞は、左歌については、「心深く、姿をかしく、いとよろ
しく」見えると評価している。対する右歌については、「夢路にまど
ふ」と「おどろかぬ」とを対応させた心は、「をかしく」はあるが、
こういう夢になぞらえた表現は「見なれたる様」と評する。そして左
歌が「めづらしく見え」る点で勝とする。

【備考】二十九番左歌は『千載集』(一〇八八)に収められている。

三十番

左持

59 ねざめしてもおもひつらぬる身のうさの数にとふとや鳴のはねがき
そふ(群書類従・神宮文庫本等) 女房
右 仲綱

60 ふけにけるわがよのほどはもとゆひの霜を見てこそおどろかれけれ
左歌、かずにとふとやそふ(群書類従・神宮文庫本等)いへるすかた、よろしくこそ見え侍れ。

右歌、ふけにける我が身のほどとおきて、霜を見てこそといへる、
はじめをはりあひかなひて、言葉たくみに見え侍れば、両首のす
がたころとりどりにして、楚忽斟酌楚忽之斟酌(群書類従)かたがたみだれ侍れば、持
と定め申す。

【通釈】

三十番

左持

59 夜ふと目覚めて、あれこれ思い続ける身の憂さの数々、——その数
を確かめるかのように、鳴がしきりに羽がきの音を立てる。

右

仲綱

60 (夜が更けたと、霜を見て気付くように) わたしが年老いたのは、
元結もとむすのあたりの霜、——白髪を見て気付いたのだった。

左の歌は、「数にとふとや(鳴のはねがき)」と詠んだ歌の姿が、
結構に見えます。右の歌は、「ふけにける我が身のほど」と言っ

た上で「霜を見てこそ」と言ったのは、首尾相応じて、言葉の用
い方が巧みと見えますので、二首の姿心はそれぞれ異なる特色が
あって、私の軽率な比較考察ではあれこれと迷いますところから、
持と決めることにします。

【注】○数にとふ 数について確かめる意か。「とふ」は、群書類従本・
神宮文庫本では「そふ」とある。なぞらえる意か。○鳴のはねがき
「鳴」は、中形の水鳥。「羽がき」については、くちばしで羽をしごく
こととも、羽ばたくこととも言われる。『古今集』の歌「暁のしぎの
羽がき百羽がき君がこぬ夜は我ぞ数かく」(七六一、よみ人しらず)
によって特に名高い。清輔の『奥義抄』には、「しぎは、はねかくこ
とのしげき也。されば、ももはがきとはいふ也。」などと注する。

○ふけにけるわがよ 老いた我が年齢の意に、更けた夜を響かせて言
う。○もとゆひの霜 「元結」は、髪を頭の上に集めて束ねる紐で、
その辺りに見える白髪を霜に例えて言う。○おどろかれけれ はっと
気づいた。「れ」は自発。

【考察】左の歌は、夜眠りから覚めて、思い浮かべられる我が身の憂
さの数多いことを詠むに当たって、成語「鳴の羽がき」を結びつける
趣向をとり、見どころにしたのであろう。「注」に記したように、『古
今集』の歌(七六一)に「暁の鳴の羽がき百羽がき」と詠まれて以来、
鳴は「羽がき」の動作を数しげく行なうものとして知られたようであ
る。

右の歌は、我が身の年老いたことは、元結の辺りの霜、白髪によっ
て気付いた由を詠むが、「更け」「夜」「霜」を縁語仕立てで織りこむ
技巧を用いている。

俊成の判詞は、左歌については「姿よろしく」見える点を、右歌に
ついては「言葉たくみに」見える点を特に挙げているが、二首の「姿
心とりどり」であることを言い、持としている。

○俊成と兼実の歌

大夫入道

61 わかの浦になほたちかへる老のなみしげき玉もにまよひぬるかな
返し 右府

62 老の浪ひかりをよするわかの浦の月に玉藻もみがかれにけり

【通釈】

大夫入道

61 (御下命を受け、) また和歌のことに携わった老骨にとって、優れた
詠草が多く、判断に迷うところがありました。

右府

62 老練の御身が、この歌合に御高評くださったお陰で、詠草も一層輝
きを加えたように思われます。

【注】○わかの浦 紀伊の国の歌枕、和歌の浦の名を借りて、和歌の
世界を示す。○玉も 詠草を例えた。「浦」「波」などと縁語になる。

【補注】初めの歌は、俊成が判詞を記し終わった後、加判を依頼した
右大臣兼実に戻送する際に書き添えた一首と見られる。俊成は当時六
十六歳で、この三年前に出家していた。後の歌は、これに対する兼実
の返歌である。

○作者略伝

○作者の配列順序は、この歌合で初出の歌の見える順序に従った。
○アラビア数字は、歌番号を示す。

1 13 俊成 (皇太后宮大夫入道) としなり 藤原俊成。権中納言俊忠の

27 29 子。はじめ葉室頼頼の養子になり、名を頼広と言ったが、のち

39 55 本流に復して俊成と改名。正三位皇太后宮大夫に至る。一一七

61 六年出家。法名は積阿。多くの歌合の判者を務め、歌壇の指導

者として世に認められた。『千載集』を撰進。家集『長秋詠藻』、

歌学書『古来風体抄』等を残す。一一一四—一二〇四。

2 8 重家 (大式入道) しげいえ 藤原重家。左京大夫頼輔の子。兄

28 34 弟に清輔、季経などがある。従三位太宰大式に至る。一一七六

36 年出家、法名は蓮寂 (蓮家とも)。家集『重家集』。一一二八—

一一八〇。

3 7 兼実 (女房・右府) かねざね 藤原兼実。関白忠通の子。従一

45 53 位関白に至る。一二〇二年出家、法名は円証。歌は初め清輔を

59 62 師としたが、清輔没後は俊成を迎えた。多くの歌合、歌合を催

し、兼実家歌壇を形成した。日記『玉葉』は史料として重要視

されている。一一四九—一二〇七。

4 22 頼政 よりまさ 源頼政。兵庫頭仲正の子。従三位に至る。武将

38 48 として以仁王を奉じ平家と戦い、敗れて宇治で自害。歌林苑の

会衆。家集『源三位頼政集』。一一〇四—一一八〇。

5 11 寂蓮 じゃくれん 俗名は藤原定長。俊成の兄弟の醍醐寺の阿闍

33 梨俊海の子。俊成の養子になる。従五位上中務少輔になったが、

一一七二年ごろ出家。御子左家に属する歌人として活躍し、

『新古今集』の撰者の一人になったが、撰進前に死去。家集

『寂蓮法師集』。一一三九ごろ—一二〇二。

6 54 仲綱 なかつな 源仲綱。従三位頼政の子。正五位下伊豆守にな

60 るが、宇治川の合戦に敗れ、父とともに自害した。歌林苑の会

衆。一一二六—一一八〇。

9 17 隆信 たかのぶ 藤原隆信。皇后宮少進為経 (寂超) の子。母の

47 美福門院加賀はのち俊成と再婚。正四位下右京権大夫になる。

似絵にも才能を示した。家集『隆信朝臣集』。一一四二—一一二

〇五。

10 20 道因 どういん 俗名は藤原敦頼。治部丞清孝の子。従五位上左

30 44 馬助になるが、一一七二年出家。和歌にきわめて熱心な人であっ

たらしい。『佳吉社歌合』『広田社歌合』を勧進した。一〇九〇—

没年未詳。

12 32 顕昭 けんしょう 左京大夫頼輔の猶子。阿闍梨、法橋になって

42 52 いる。清輔らとともに六条藤家の歌学を大成した一人で、訓詁

考証に優れ、多くの歌合に出詠して活躍した。一一三〇ごろ—

没年未詳。

- 14 24 資隆 すけたか 藤原資隆。豊前守重兼の子。従四位下少納言に
なる。歌林苑会衆。家集『禪林瘡葉集』。生没年未詳。
- 15 行頼 ゆきより 源行頼。伊豆(伊賀)守光行の子。従四位上太
皇太后宮権大進になる。一一一四—一一八〇(『玉葉』)。
- 16 26 基輔 もとすけ 藤原基輔。修理権大夫頼輔の子。安芸守などに
なる。生年未詳—一一八五(『玉葉』)。
- 18 40 丹後 たんご 藏人大夫源頼行の女。はじめ九条兼実^{兼実}に仕え摂政
家丹後と呼ばれ、のち兼実女の後鳥羽院中宮任子に仕え宜秋門
院丹後と呼ばれる。生没年未詳。
- 19 35 別当局 べつとうのつぼね 大宮権亮源俊隆の女。九条兼実の姉
の崇徳院中宮聖子に仕え皇嘉門院別当と呼ばれる。生没年未詳。
- 21 23 俊恵 しゅんえ 木工頭源俊頼の子。東大寺の僧。白河の自坊を
31 43 歌林苑と称し、ここに広く歌人たちを集めて交流の場とし、歌
会や歌合を催した。家集『林葉集』。一一二一—没年未詳。
- 25 良清 よしきよ 藤原良清。右馬頭範綱の子。従五位上皇太后宮
少進になる。兼実家歌壇の常連。生没年未詳。
- 37 41 季経 すえつね 藤原季経。左京大夫頭輔の子。重家の同母弟。
49 正三位に至る。一一二〇一年出家、法名は連経。家集『季経入道
集』。一一三二—一一三二。
- 46 経家 つねいえ 藤原経家。太宰大貳重家の子。正三位に至る。
六条家歌人として活躍した。一一〇八年出家。家集『経家卿集』。
一一四九—一二〇九。
- 50 58 資忠 すけただ 藤原資忠。中納言兵部卿資信の養子。(実父は
左馬助忠房か。)木工頭になる。兼実家歌壇の常連。生没年未
詳。
- 57 師光 もろみつ 源師光。大納言師頼の子。左大臣頼長の猶子。
正五位下右京権大夫になる。出家は一一八一年ごろか。法名生
蓮。家集『源師光集』。生没年未詳。

治承三年十月『右大臣家歌合』注釈

○付記

この歌合は、日本古典文学大系『歌合集』に収められ、谷山茂氏がこれに注を添えられている。そのため、本稿のような注釈は不要かも考えたが、これまで俊成判歌合の解釈に関する小稿で用いてきた、通釈・注・考察の項目を立てて整理することも、より広い面をとり上げる意味をもつのではないかと思ひ直し、本稿を残すことにした。